清俗紀聞

第六

數帙

卷之十二　祭禮

卷之十三　僧徒

以上六本大尾

ヲ7
3316
6

門 ヲ7
號 3316
卷 6

早稲田大學図書館
35.1.28 受入
藏書

早稲田大學圖書

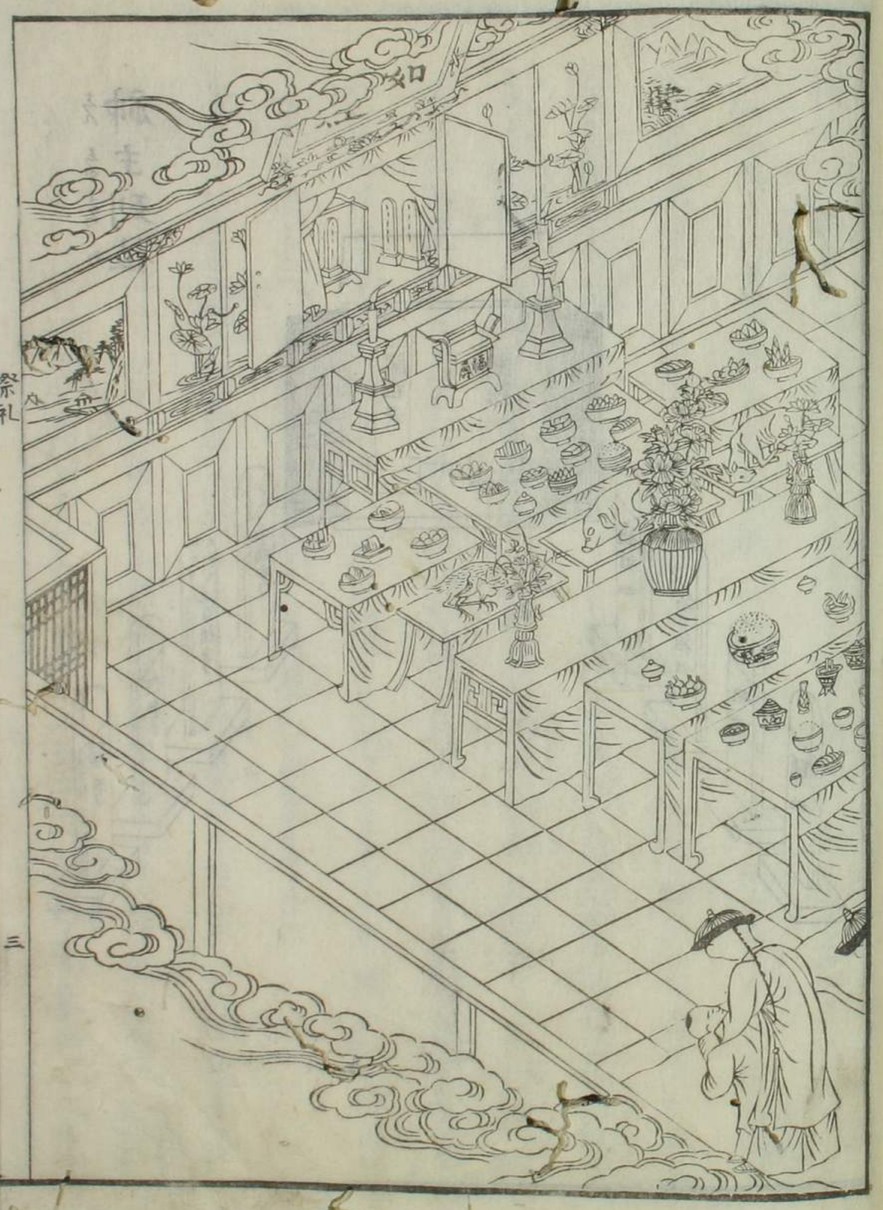
清洽紀聞巻之十二

祭禮

先祖を祭るは正月三月十月定式の祭祀なり夏至冬至も祭る正月は歳年の十二月廿八九日の比主人盛いとなる家廟は一ふ祠堂おのゝ祭る正月は歳年の十二月廿八九日の比主人盛服潔淨なる常服なり を着し家廟に至り神主の前に拈香し拜し跪く神主に向ひ今迎新春恭奉祭祀と告ぐ廟の側に高卓子を立て祀神主を暫く移して後家廟を掃除潔淨し掃除の奴僕 紙手に えのごとく神主を安置し神主の後に真像をかゝ一ふ真容圖又行樂圖と云 前に香案殘香爐燭臺を備付其前に高卓子を立て大なる花瓶は花瓶は燒物唐金 牡丹の造花をいけ造花は牡丹は限る富貴を示す意牡丹は紙を製し 脇に小さき花瓶へ生の草花を多色を付き蠟燭又は燭臺花又は生花とも 盃 盃を挿し左方へ茶盃燈盞竜をかき燒物の皿に荔枝竜眼落花生松子

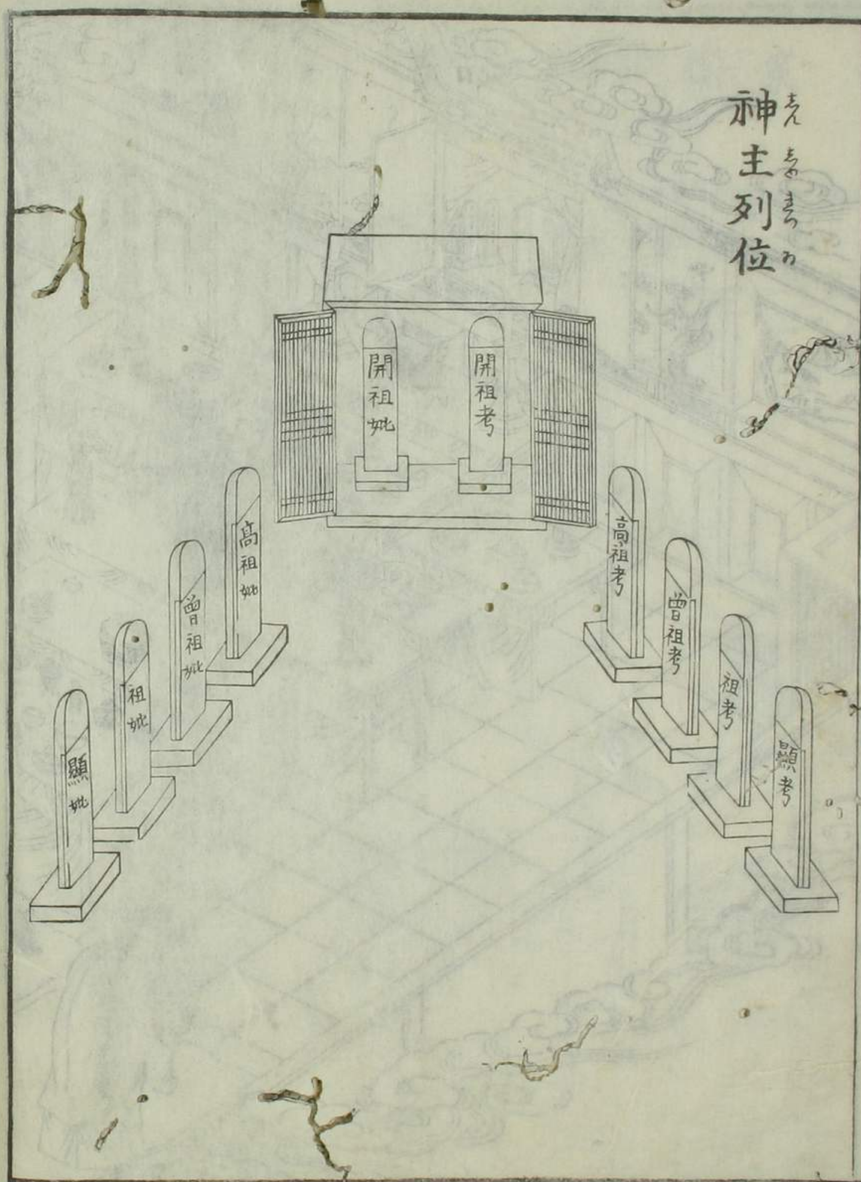
東瓜糖桔餅或ハ糕餅菓物種々ありびみ天根みく水仙花菊花等夜製し供物都合二三十只備へ歪元朝みちを主人早辰み沐浴し盛服を装し子孫男婦を引領ちく家廟へ至り廟外みて盥洗し燈を照し三牲を備へ饌羞進ず饌々魚肉野菜煮物みして磁器に盛り爵盃み酒を盛る主人跪く盃を進し畢りて拈香礼三跪九叩首を漢人ハ四辞満人ハ主人拝畢りて嬪子廣子伯叔男姪婦女等同姓の親族ちく〳〵拜す廟拜畢りて家内の祝儀を速に中刻に徹饌す廟の卓子徹饌の時も主人子孫礼ちく拈香礼拜ちく徹ハ玄三牲ありびみ饌の〻徹す其余の供物も其時ちく〳〵ハ礼ちく十八日みを主人徹す饌を徹して暮ちみ三牲ならびみ饌の物を煮ゑして家内残らず食ハ元宵薦作とふ進饌ちを元日ずりみして二日よりを進饌眞酒等の事ありし十五日ハ上元佳節少早辰に主人盛服し

多燭ハ照し香ハ拈し眞酒す三牲供物等ちを人ハ十八日早辰に主人盛服し子孫を引領して盥洗し拈香礼拜し跪て神ちを人びび恭請徹位と告ぐ端供物を徹し廟厨の扉を開して前の香案香爐燭臺をかぐるを廟門を閉す


如
祭礼

家廟祭祀之圖

神主列位



神主ハ正祠ヨリ五代の神主を立正祠の上段ヨリ開祖の神位を正面ヨリ立五代以上の祖ハ順くに薦新ヲ兄弟を薦座ヨリ伯叔兄弟子孫姪婦女等の主ハ祔祠ヨリ立置十歳以下に死くるを殤ヨリて主を立ベ嫡子ハ七歳以上ニて主を立婦ハ夫生世の内ハ正統ヨリ正祠ヨリ主位立ル事を得ベ先祔祠ヨリ立ベ夫死して後正祠ヨリ移ス○三月ハ清明の節ハ内吉日ヨリ祭祀吉暦ヨリ事ヲ

ヘ〻び祭祀式正月ヨリ行ル〻○七月十五日ヨリ盂蘭盆ヨリ事ヲ

八月九月の間ヨリ祭祀ス〻○十月朔日ヨリ祭ヲ兄を十月朝ヨリ也式ハ

正月ヨリ同じ○夏至冬至の祭ヲ式異ヲ事ヲ

○正月ヨリ〻び清明の節ハ内吉日を〻び墳墓ヨリまヲ兄を春祭ヨリ

一ヨリ掃祭式ハ朔日ヨリ三日ヨリ〻び程餅菓物野菜等ハ供物を数〻三数の外定式の供物清浄ヨリ安置して箱ヨリ〻び竹籃ヨリ入墓所へ持行先墓所へ大ヨリ

天幕を張（天幕ハ青布を蓋色ヨリ深遠ノ位ニ布幔ヨ）毛氈筵子を舗く元祖石碑の前おごとに卓子を設

香爐燭臺を傍に置き線香を立供物を磁器に盛り使主人

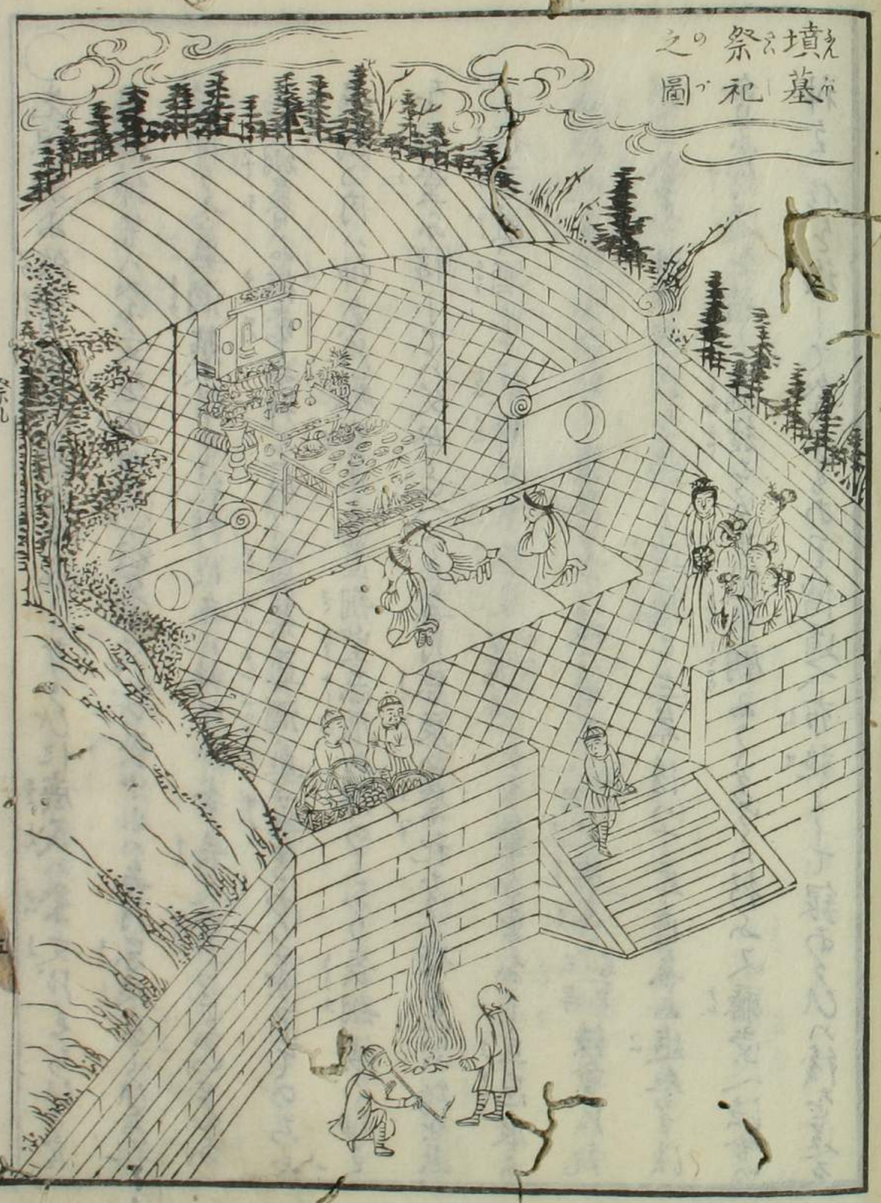
あるひは子孫盥洗して猪口に酒を盛り眞しく拜香礼拜す側に奴僕大金紙

冥衣紙を燒捨る（大金紙冥衣紙の類男子拜礼して婦女拜礼ハ此日ハ家内の男女あるいハ親族朋友にも案内して墓所に請ず）

食し酒宴をなす祠堂あるものハ祠堂に宴を催す（大抵ハ墓所地面の内に祠堂を建築の用あり）親族朋友の内にあるものハ脚を傍ら祭礼して山野景色を見ル

あるいハ終日遊山に逸を踏青とゝ杭州ハ西湖に船をうかべ遊散する

墳墓祭祀之圖



○先祖祭を致齋斎戒等の事なしなびに廣氏の祭文式をもちひす宮
家卿紳等の祭文を用ゐる○祖父母父母の喪中は毎月忌辰あるひは朔
望神を〻奠酒拈香して礼拝に毎日拝するを事常の葬らざるいぜんの
ごとく朔望は柩前を拝をなし奠菜奠酒奠菜等あり葬ありてのちも
喪期の内は神を殿廳堂に安置朔望忌辰の拝のごとく喪期満て神を
を祠堂に移して父母ともに毎月忌辰の祭祀なし朔望には燈を点
拈香奠酒して礼拝す本忌辰四月日なりとても祭ることなし旦忌辰は
子孫吃素すること喪終りて後は周年一周忌三周年三年忌法會長老執
行して祭ることは此際僧道を請じ追薦を三年後は十年目毎に追祭す法
會は僧道を請じ誦経をなすはいえ家廟はなくはなくは行ふ又廳堂へ法會の
神を〻位を移して祭ることもあるを僧道へ布施をして銀あるひは後を送る

先を懺資ぶる僧一人一日錢百文或は百五十文銀あるひは一〻五分
二〻位任持長老等へ銀十〻位を供法あるひは焔口等執行の者
三百目五百目身分に應じて不同あり是を供物料ならびに其内あるを又
誦経の上齋非時の食事を出す齋を早齋と云非時を晩齋と云
僧誦経の名は磬木魚を叩く此具を備へる持参もあり又家にあるを
要もあるを磬木魚の圖式は僧侶部に出ゆへ省略
を持参して賜ふ事あるを喪中は法會の名を僧道を線香蝋燭
経文を大略普門品金剛経等あるを其余は詳に知ること
○周年三年十年目毎の法會追祭の式は春秋祭祀に同じ朔
望は家廟へ三牲一副魚肉菓子類十種位を供へ主人早辰に沐
浴して盛服して神を〻に酒を奠して拈香礼拝す

○開祖考妣祖考妣頭考妣々其人の延生忌ゝ廳堂へ真容圖をかゝ
き三牲魚肉菓子類をそなへ燭をともし饌を進し眞酒抜香しを
祭るの式朔望ゝ朽ゝし昊を冥期とゝ真容圖へ父祖の未朔ゝ面像
平躰を正写みして掛物ゝ仕立永遠追慕して忘れぬ考を示祭朝ゝ
線〻〻在らざるくう色まふ又五六十歳ゝ成りて自分の像をうつし
朽〻半あるを我平時得意の像をうつそあるくべ山水城ゝのミうふく
中〻〻景物遊戯の躰をうつしあるひゝ琴碁書畫をあれ
ちむ類をうつしを行樂圖とひゝ又真容圖とゝ

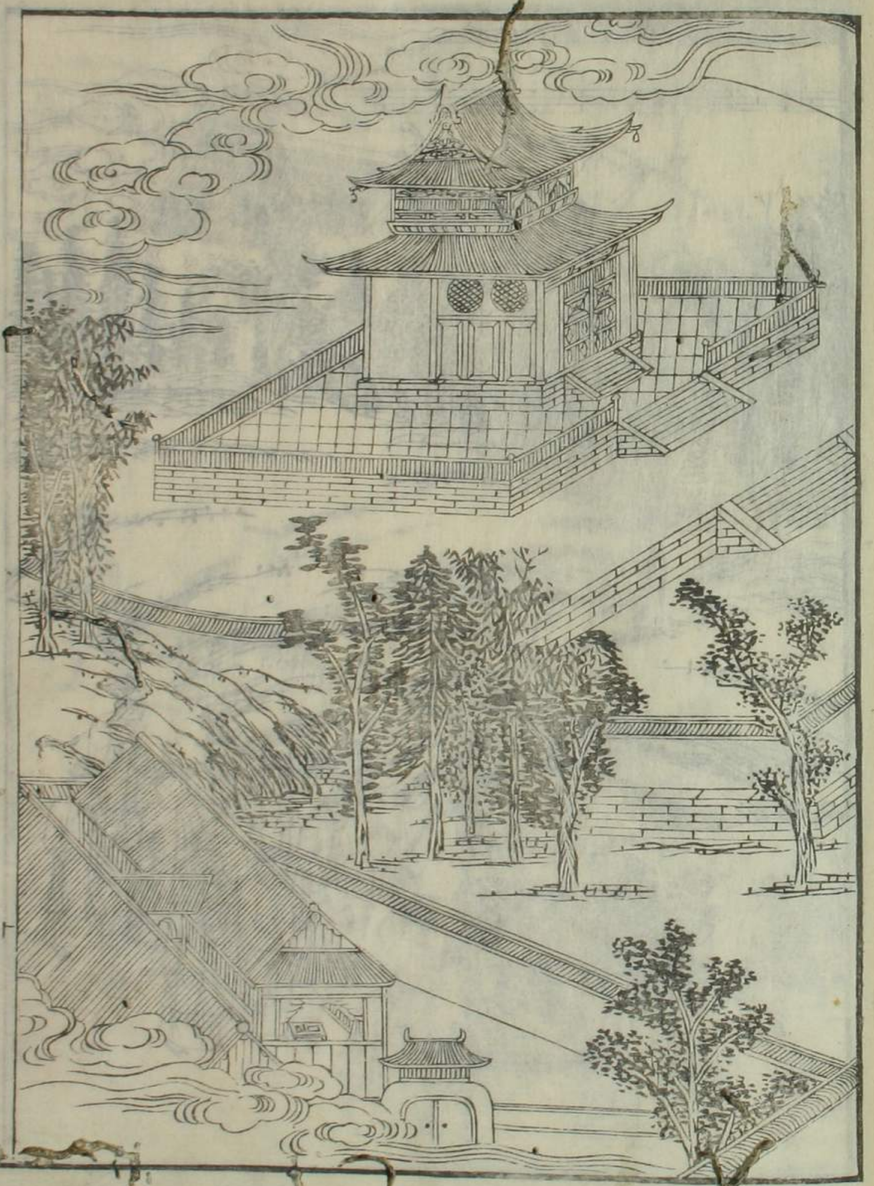
真容圖

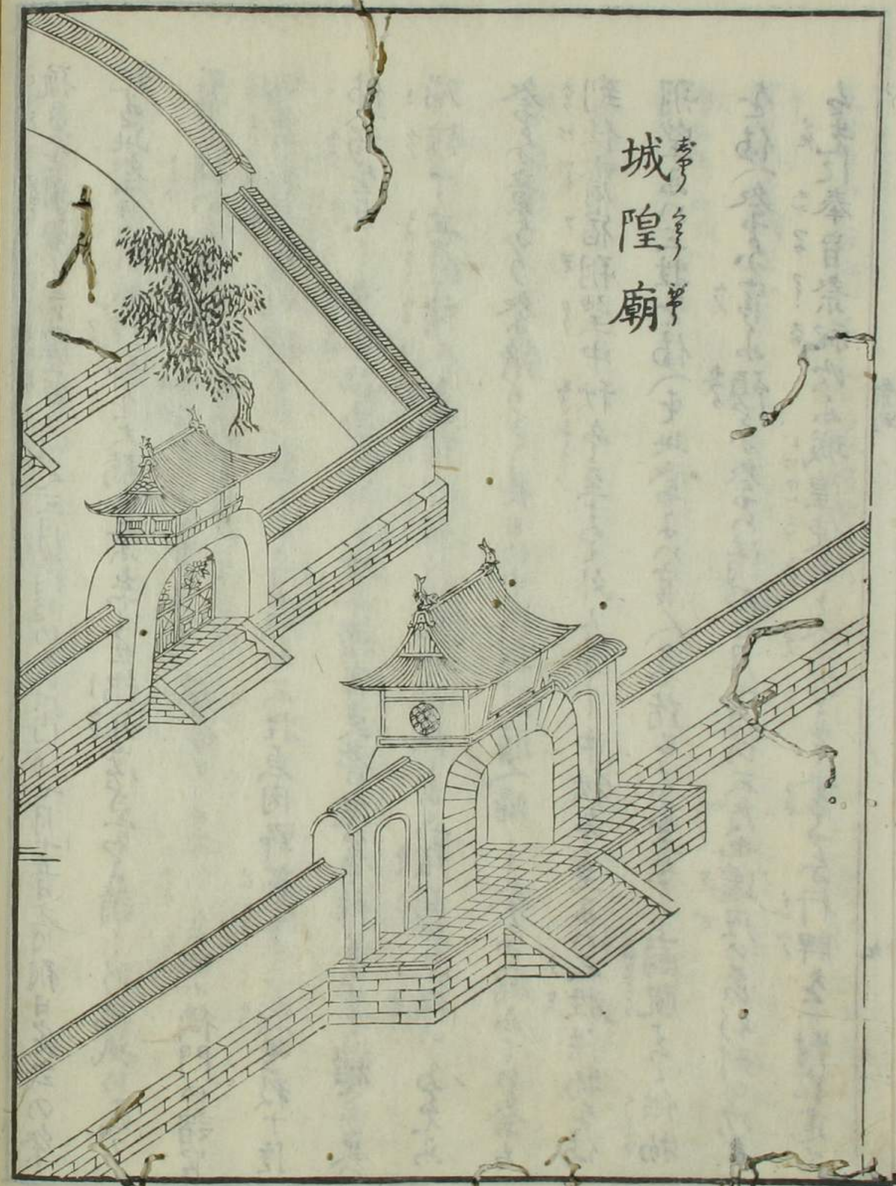
○祭器草碗碟等を多く平時需用の器潔浄なる様用ゆべし外みは使へ
ざるもあるべき事なり○家廟の大小廣狹は家賢の貧富みるべし等
かゝず方位向背は家作の向みを慎べし北向を嫌ふ廟中平時の掃除點燈ホ
も奴僕經手にて掃除等の時廟廚の扉をみだるべからず
○主人出入み祖に告ぐる事かゝしかちびみ生れ節家廟み見へ慎むる事
かゝしみ孫倣親みも必告ぐる○中秋重陽冬至の佳節み付く家廟
を祭ること年れゝ古家の舊例みるべ執行ふをあるべ一定みたるべし
○家廟み佛像を安置せば神主あるべ佛像は内廳ホ厨子を補ひ
安置す○先祖の遺物は封固して潔浄なる匣み入れ收貯し妄み
他み出すべ遺物分給の事は親族疎ら・古遺命あれは遵ふべ子孫等て
櫃み賜ふ事を得べ其親族或は至親疎き朋友等父祖の筆跡等

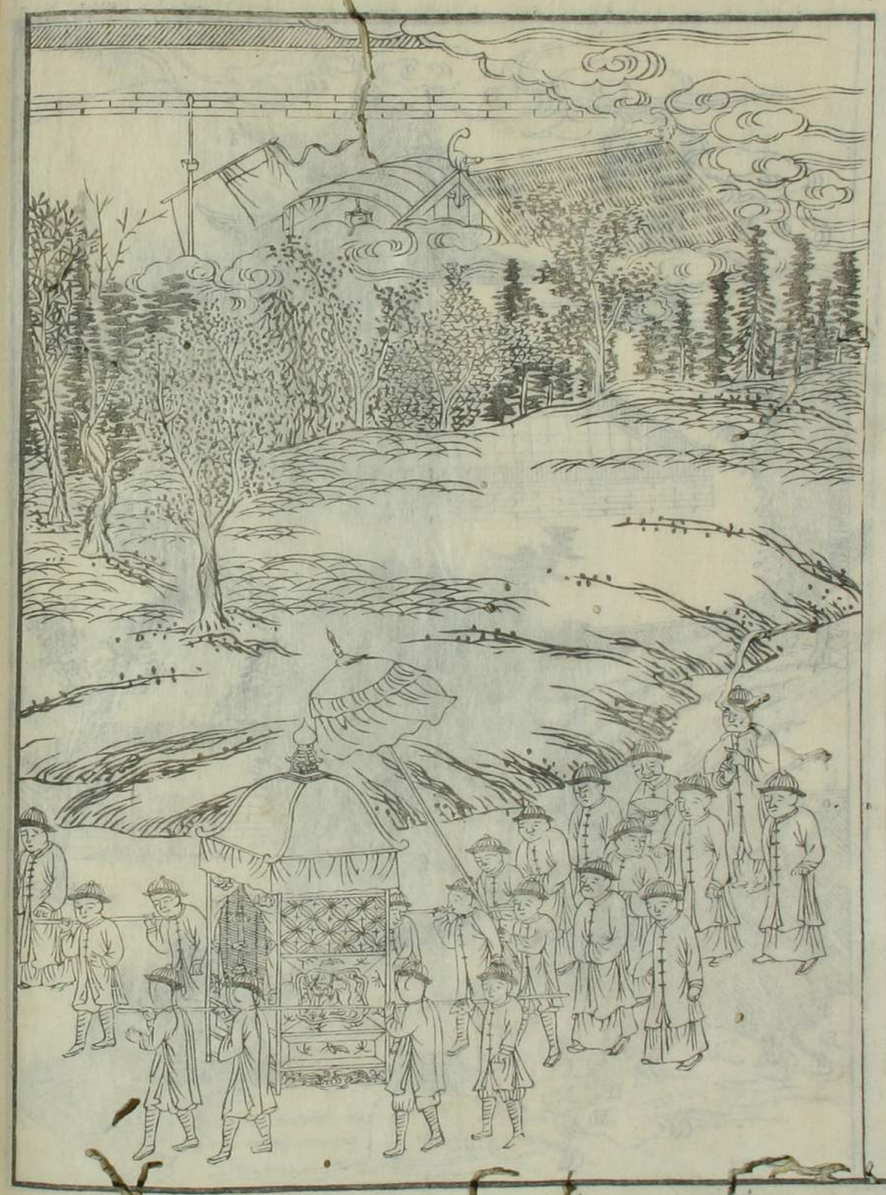
を所望すべ家廟み告ぐ詩文章の類の筆跡を賜ふもあるべ家狀號
具等を携ふ事かゝしべ親友より望まるべ事もかゝし
○水火非常の節は即別家廟み至べ神主を殘らず取集め櫃箱ホに
收免子孫甥姪附隨ひ難を逃べ親族朋友又は寺院等へ預置べ難
移べ廢廟所恙なべ時は移して祭祀を執行べ其廟所燒失流
失破損等みべ後日事あるべれは外み假廟を設け妄置し除時み
祭祀を執行す是を壓驚祭祀とふ取集る時は事急なるゆへ禮
儀みなべいるべ家廟を收めざる内は外事不
及べ○農禪の祭祀は小祥大祥は則周年二年あべ
○城隍は古へ其地み德を補る各官歸依を城隍神と崇め其地の守護
を諸省府州縣もみ廟あべ知縣は其の官到任して三日目あるひは

五日の条諸司を召して城隍齋宿する祭式前日の禮房宣州縣の六部を召し官吏を召し
舊例の儀注を下出し牲の供物を整へ祭文を作る官出て当日の本宣
縣令は紅絲を帯び紅府は紅袍 吉服 朝服して禮房宣 執事人役掛りの役人也 を引領して城隍廟
の正門に至る禮房宣供物を設る人
酒を置く燭を点じ本宣三跪九叩首の礼を行ふ其地の
安全を祈願し祭文を読み奏聞を 祭文は讀祝宣より執事人のうちなり 拜礼す
廟祝の宅へ行き茶筵飲を設く休息して帰館に廟祝は其地の
代く朝祝を掌る 朝廷の 投持を兼ねて形ひ
官ふ官ふ官ふ官ふ官級の事 もつとも城隍神事なる其地の名賢等あり紀
所を近縣近府の神祠を巡り安堂に憩じて府内の城隍を祀
府の縣の縣内の城隍を紅縣の縣の城隍をはじめ城隍神を
紅例紅縣の生氏を召して官あれば陽宣と呼ぶ城隍は陰府を

孤魂を司る故に陰宣と呼べ三月清明の節内に七月十五日十月朔日定式の祭
祀を此祭日は城隍神を大轎に乗せ郊外廣野に請じ祀孤の為
に構へる廟壇へ 廟壇は草茅の仮屋を設け祭れば百霊降す 遷座せしめ本宣を始め衙門の諸官
御曲の者老を引領して祭る或は三牲魚肉野菜菓子類等形十種
供物を点じ本宣拈香礼拜を次に諸官吏者老等拜礼して諸官吏の
帰館す其後諸人各拜礼拜を祀孤の陰間の孤魂の為
祭る意なり祭終りて其日の申酉刻に廟帰り奉る廟前の祭を
到任齋宿朔望中秋冬至なる外なり中秋冬至は三牲供物を
朔望は三牲を供へ此祭は官人各拜なる外なり廟祝は供物
を供へ祭る官は清明中元の三度也遷座の民列の次第
も先に奉旨祭祀次に城隍使司と金字を書る行牌を一対建て




城隍廟

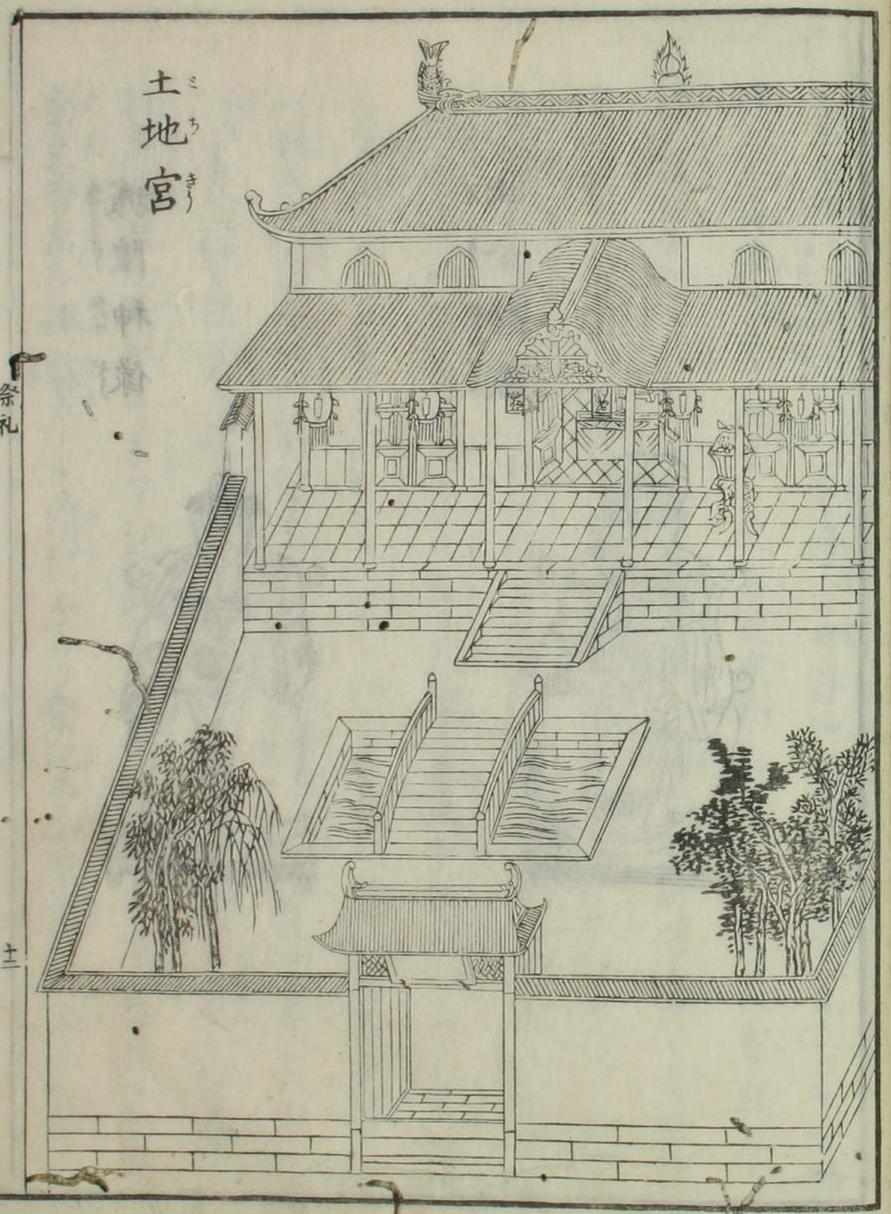


請城隍神郊祀

執事旗鼓涼傘あり道すがら音樂を奏す（樂は樂戸司より之を何等の學成奏するなり廣人智事秘守）右三度の祭祀あるべし廟所年分の供物料香燭料ならびに祝官の俸米等其地の物成より開銷す城隍の像は本州より刻々手足首領運動せる作ると雖も府州縣の官衙品級に隨ひて衣冠を刷ひ座中あり泥塑の像もて唯神主或は銘ばかり書をもてまなし都て神像あるを

○土地宮（土地宮とは土神の事也）福德正神と稱し土地の守神なり郷里村落ごとにある土地神祠多くは小にして大なるは自家地面の内にも土神祠を造作し安置す廟宇土地の大小ありて不同あり二月二日聖誕生日にて祭祀す（神祥何とか支詳なり）廟内（三牲供物種々使香燭を点ず祠官奠酒礼行し祭る諸人奏樂男女群集す朝廷の致祭は郡ふ故官ふ此る事なし祠官俸米等の支も乃し祭祀香燭料は諸人喜捨して祭るべし年分の供料祠官の過活等不足なし

土地宮



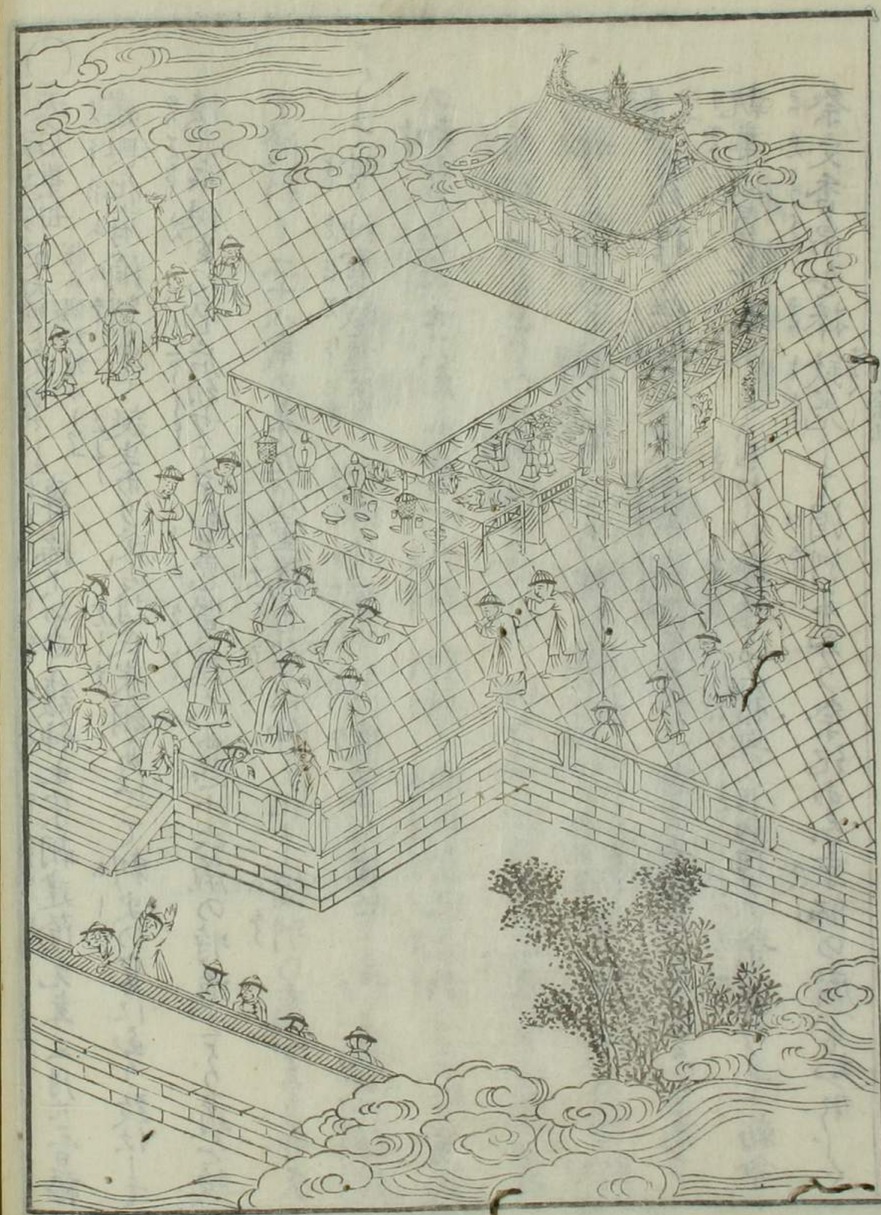
城隍神像

土公神像

○天后聖母（一名天妃と又媽祖娘々と云）專海上の守護神也宋朝建隆元年三月廿三日福建興化府湄州に誕生あり父を林氏宋朝に仕へて刺史の官に昇り致仕して後天后徒生の日后幼少より智恵賢德人に超十六歳の時道士より道を授り陸行し二十八歳の年九月重陽白晝に神と化し湄州の高山より昇天して世に神霊感應著し仰祈誓する所に應ぜざる事なし代々の帝王封賜の勅あり康熙廿三年に勅して天后に封賜し春秋祭祀免許の旨あり湄州聖誕の地なるを以て大に廟祠を造営し神を安置し其外京師並に諸省府州縣に廟あり廟門前に下馬牌を建（下馬牌は朝廷より免許ありて建る）祭祀の式は大牢（牛羊豕）を其外種々供物を備へ玉帛香焚を奠し祭る其地の官員之を兼り執事人員を支配して司らむ朝廷より禮部官の内兼祭官として勅命祭文香帛を捧欽差して湄州に到り祭祀あり京師の廟へもおなじく

天后廟

祭礼



天后聖母像

欽羌を立て此祭をつかさどる天子も羌祭を行ひ給ふ

（八其地の本官より禮房官（命）祭祀の事を司らしむ祭日みな本官兼諸官人

糸辣此官人糸辣等を諸人男女糸指揮集也を府州縣官大牢をもつて

祭る神糸の供物彩十種香花燈燭舞吹也祭日八三月廿三日初日の祭祀春

秋二季ハ二月八月の上癸日を用ひ兼祭官糸辣の次第ハ糸日ハ諸執事人員

齋戒して當日早辰沐浴吉服して廟に詣り祝燭を点じ香を拈じ手を

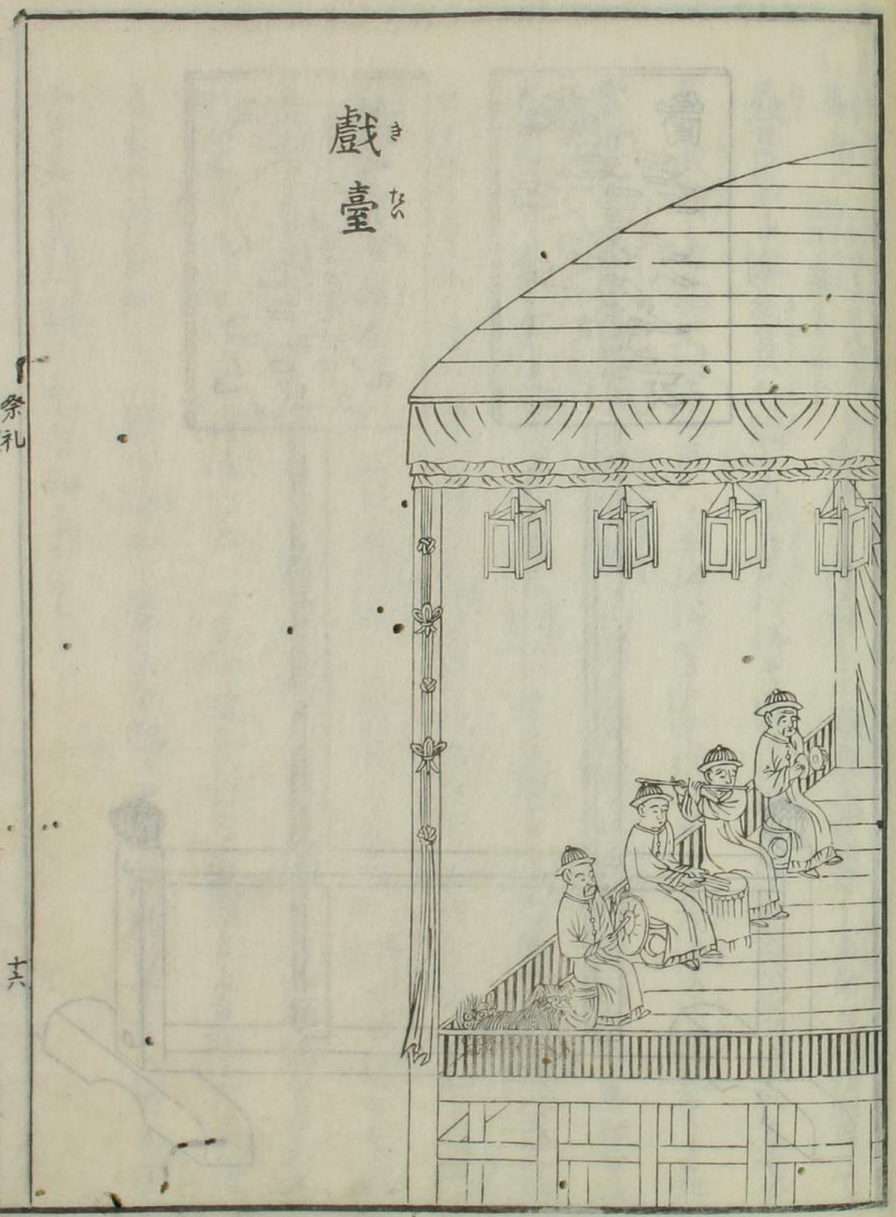
長官諸官の次を當中其餘諸官執事列班す贊禮官東方を立て三跪九叩首起坐の式を唱

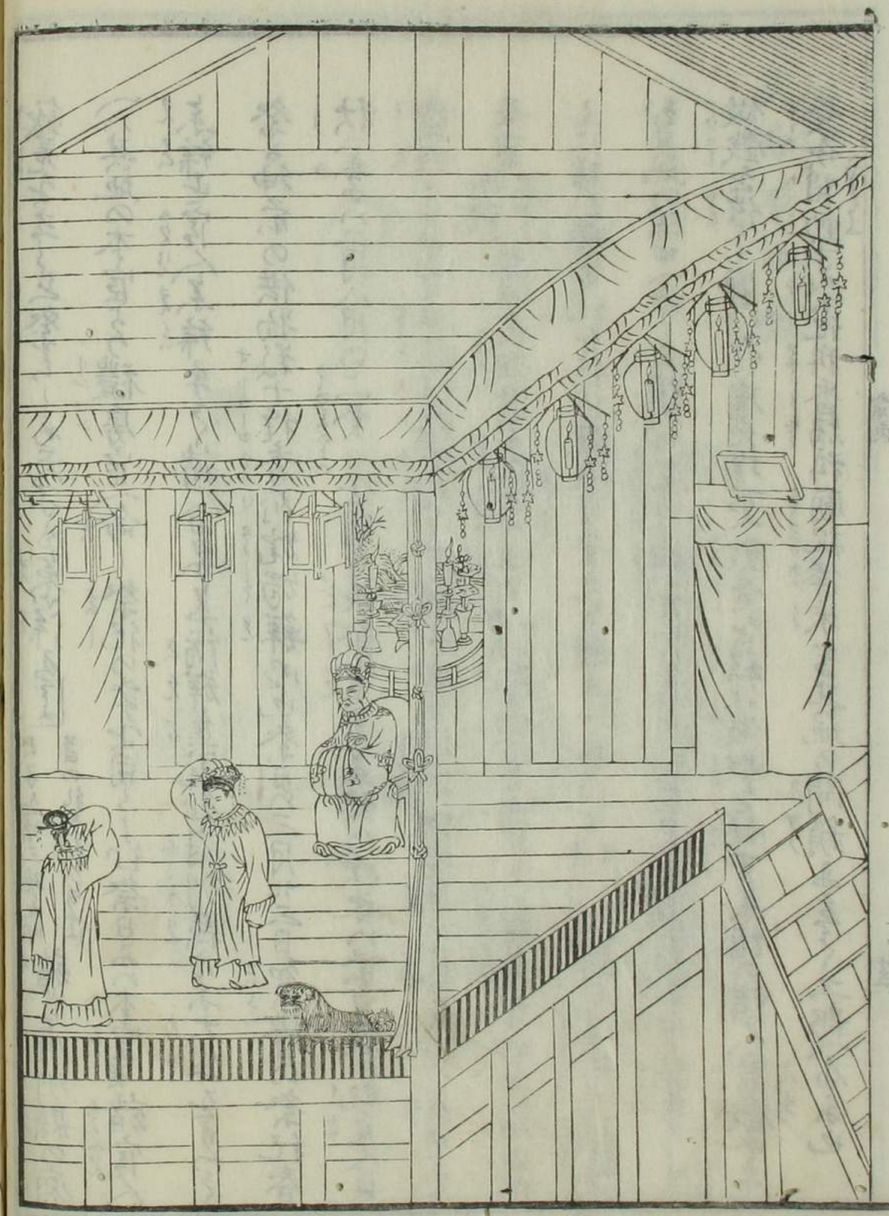
ふに依て諸官礼を行ひ讀祝官祭文を讀手を焚化す祭文ハ時ふ値ひ仍る也諸官拜手して退散す

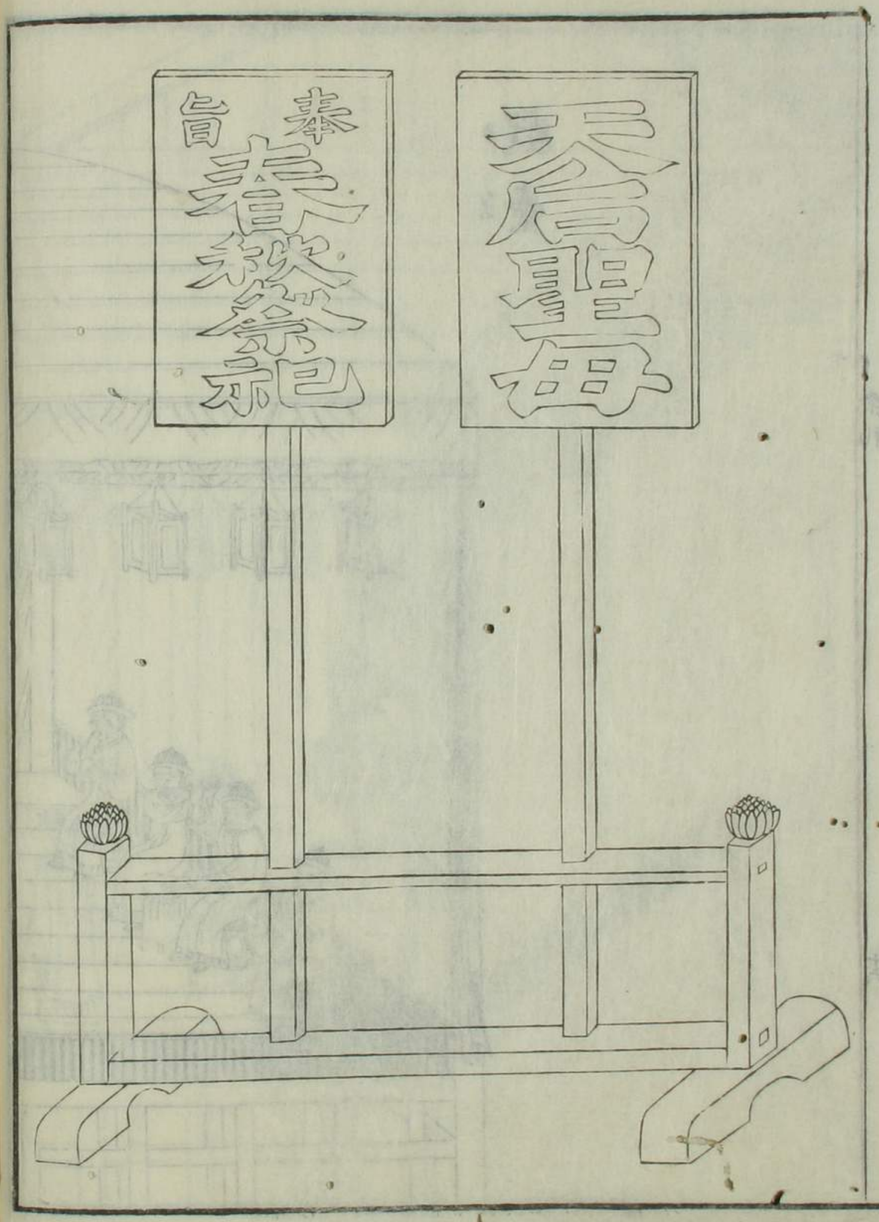
其地の保甲（命して諸人の口角爭鬪訟を極むる祭日ハ豪家富民を施主として

做戲を催し廟門外の廣地場に（戲臺を設け做戲を献ず糸指の諸人看戲する

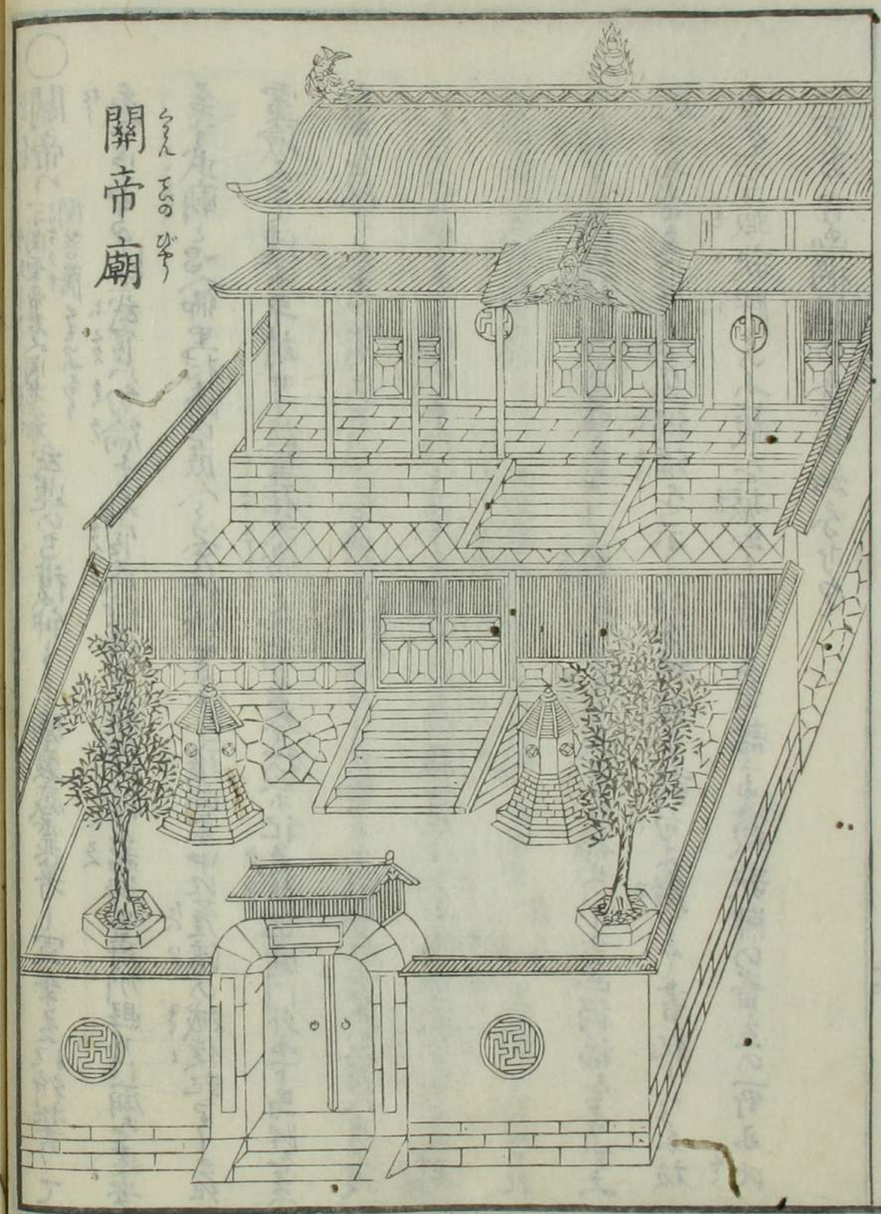
晝夜鬨動す祭祀科音焼科廟祝俸米多其地の開銷ハ官工部（出ふ也


戲臺

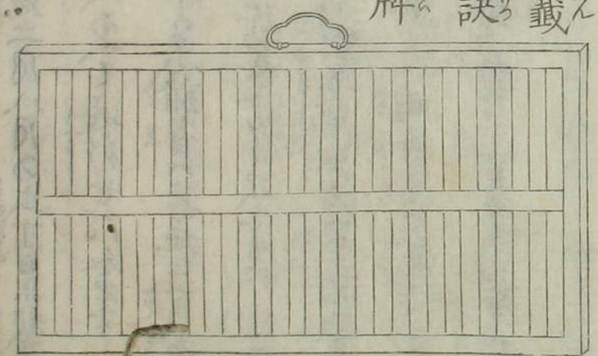


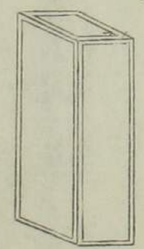


○關帝ハ（亦聖帝君又関老爺武運の守護神）にて感応霊著し軍事ゑに祈願して
（関菩薩ともよまり）
遠世ゆゑ多し武官ハ勿論も外官民信仰ゑ数他の神ゑ都諸省府州縣ゑに廟を建安
至す武廟と唱へ御里村落の庶人ゑ信仰せゑ雍正年中に臺湾の城隍起ゑ霊
霊験あて速ゑ平靖せ故靈佑大帝と加封ゑ春秋祭祀免許也廟門外ゑ下馬牌を立
大牢を以て祭ゑ祭日ハ五月十三日歸天（薨去）の日を定祭日とゑ春秋二祭ハ二月八月上戊
日を用官祭年て俳人（俳優）す男女を梅ふせゑ戯を献する事ゑ祭式祭科ゑハ開
銷の事ハ天后廟ゑ同じ○天后廟関廟ゑ霊籤と云物ゑ（一ゑ籤ゑ 竹筒ゑ）本或ハ竹を以て札
を作ゑ百枚一の百ゑ番ゑ号ゑて箱ゑ入く牧す人先を振出て吉凶禍福を示ゑ之
別ゑ其番ゑの所ゑ吉凶禍福を示ゑたる神苑を詩句ゑ綴ゑて書記ゑたる板
ゑ先を籤訣牌ゑ云ふ籤を振出ゑ番ゑを語ゑ籤訣牌の番ゑの所ゑ比
へ合ゑ吉凶禍福の意を知ゑ事


關帝廟

關聖帝像


籤訣牌


靈籤

○孔廟（文廟）に孔師弟子諸省府州縣ごとに廟を建て二月八月の上丁日に釋奠の祭祀あり廟門に下馬牌を建て官員其外庶人あゆて通行せざる事なり孔師の廟へ欽差を命じ致祭あり天子孔拜しの小諸省に其地の官有預り支配して司る孔子の節を天子の外に其地の長官なり又丹墀の上に登る事あらず丹墀の下にて拜す蓮蓋邊豆沼沚の草蘋蘩の毛皷樂初獻亞獻終獻等の事に祭酒先生等に諸秀才の輩に免三跪九叩首等の禮式あり廣人妄に窺探する事を得ざれば詳に知事あらざる

文廟の圖部學部に等

清俗紀聞卷之十二

清俗紀聞卷之十三

僧徒

○唐山に禪宗律宗天台宗ありて道家に律宗天台宗を至て少し総じて僧侶は天子より官位あれば絶て朝廷に出る事なし僧侶文武官位なりて格式なし官位なれども田地等莞行ある事も多く官位なれども寄附の事に至て稀なる古人の知識なりを住持なる格別佛法仰の僧なれば居住せる時は永遠香華の助として田園多く寄附せらるる事あり高名なる大伽藍を一山に付く山田地等あり其外檀越の官人富家豪民より喜捨して金銀多く田畑菜園等送る事あり故に大伽藍衆多の僧なれども事足りなり

○寺院の境界に石柱を造りて榜示あり自是東西南北某寺境界

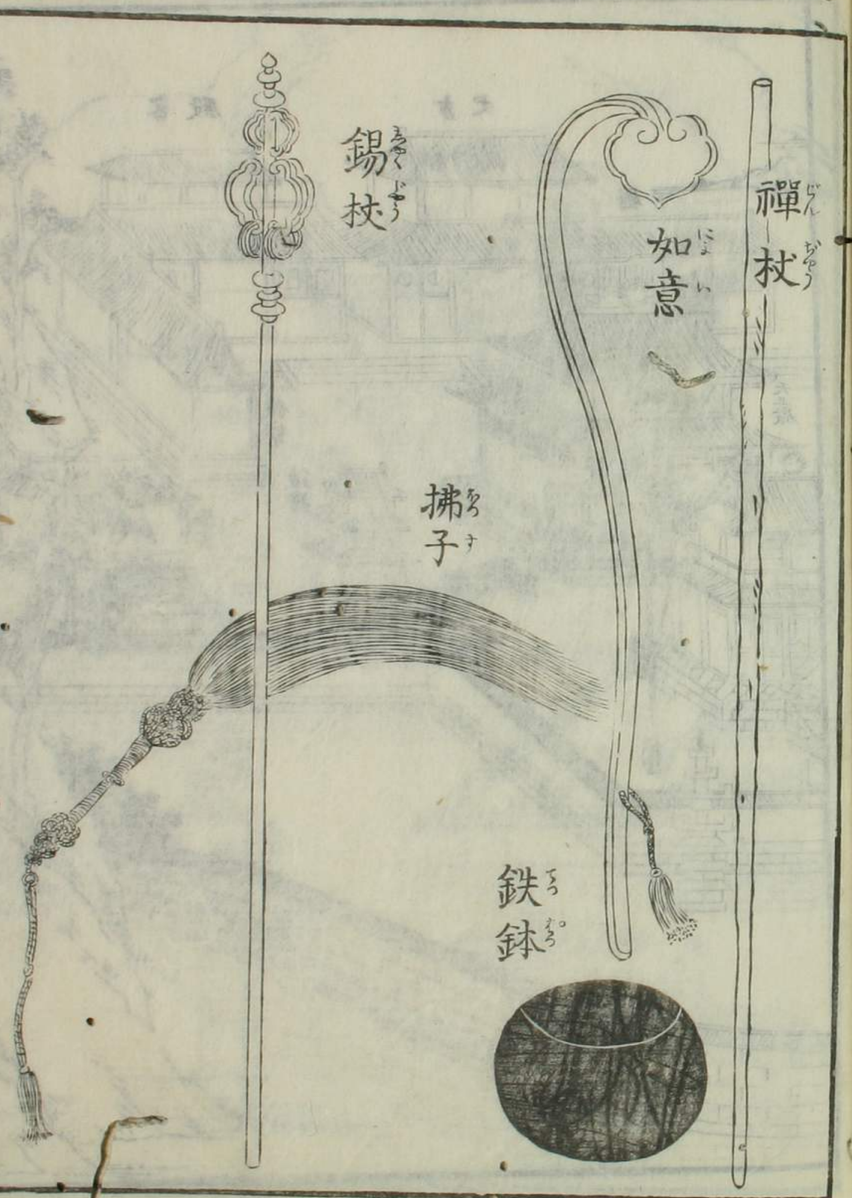
さて出記して立亟ゆり本山未寺等の制あく大寺あゆ所の地名或山号に付らゆ
寺或本寺と称唐ゑば普陀山観音寺ハ本山みく其山中みあゆ所の寺ハ未寺也
一山の諸物ゆ其本寺に預らゆ所あり大寺ハ住持の外首座。都寺。監寺。典座。知
客。副寺等に重ゑらゆ役僧あり也老僧らあるひゆ世事を疎く又ハ病身等
みく勤めず死僧ゆ銀子或納免勤或免ゆ是を養老銀とゆ 元五百目以下ゆ 座猟頭座のゆ
遍ゆもあり百座都寺以下に役僧ゆ寺法みく付らゆ名目あゆ寺内ゆ
の品級あり此方に僧正檀林あゆ
格式ゆもれし陪従ゆ官人のごゆ紀事ゆ車轎ゆ格式みく富事ゆ
ゆく多ゆ歩行ゆ者ゆ病身ゆ遠行ゆの節ハ轎みあゆ事あり
歩行の時ゆ侍者一人の外僕を連ゆ事も稀あり寺中役僧ゆ時く智代ゆ
夫ゆ勤ゆ或見ゆ侍持ゆ者ゆ圓ゆて昇降或あゆ且僧随身の品ハ如意拂
子禅杖鉄鉢にかぶゆ僧の奴僕ゆそかゆ事ゆ

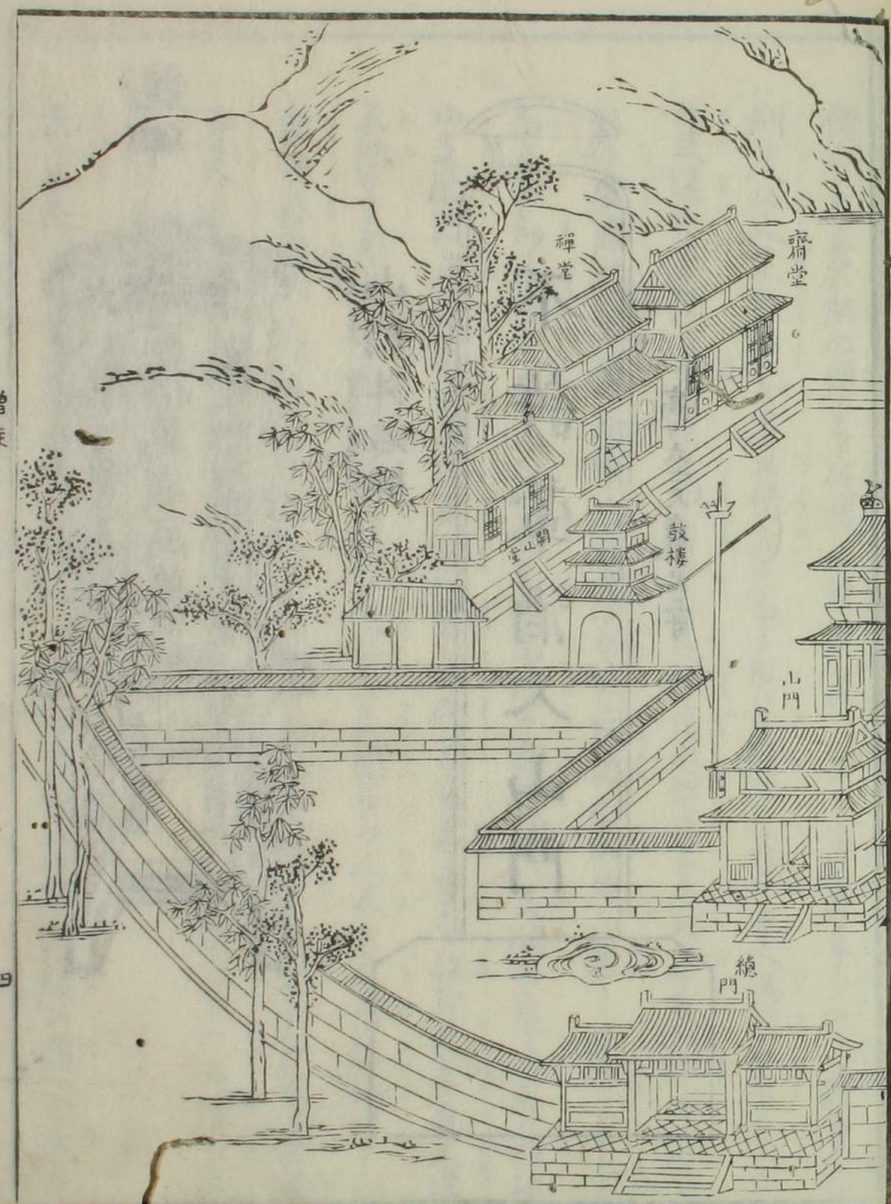
寺院の構造ゆ大門二の門天王殿本堂禅堂開山堂鐘楼鼓楼廚堂
浴室方丈客殿役寮厨下等あり都く一堂宛別楹み建ゆ役寮廚堂浴
室等ハ一楹の内みく仕切ゆ且梁間等に定もれし大門外ゆ不許輦
酒入山門ゆ記ゆ石牌ゆ立亟事定法あり大門みハ何く禅寺ゆハ
額或扁本堂みゆ大雄寶殿ゆ書ゆ額或扁其外殊額等に文字ゆ
定法ゆし勅額給賜の寺ハ二の門或ゆ本堂の内みゆ立亟六門み勅額ゆ
事あゆ且ハ下馬牌等ゆ事ゆし大門ゆ左右みゆ金剛二の門ゆ左右前後みハ四天
王ゆ面みゆ彌勒菩薩正面の後みゆ韋駄天尊ゆ安置ゆ本堂の本ゆ釋迦
両側みゆ羅漢ゆ安亟し本ゆの前みゆ皇帝萬歳萬萬歳と書ゆ牌ゆ
立亟ゆ龍牌ゆ寺院毎みゆ亟事定法あり官みゆ面迎も

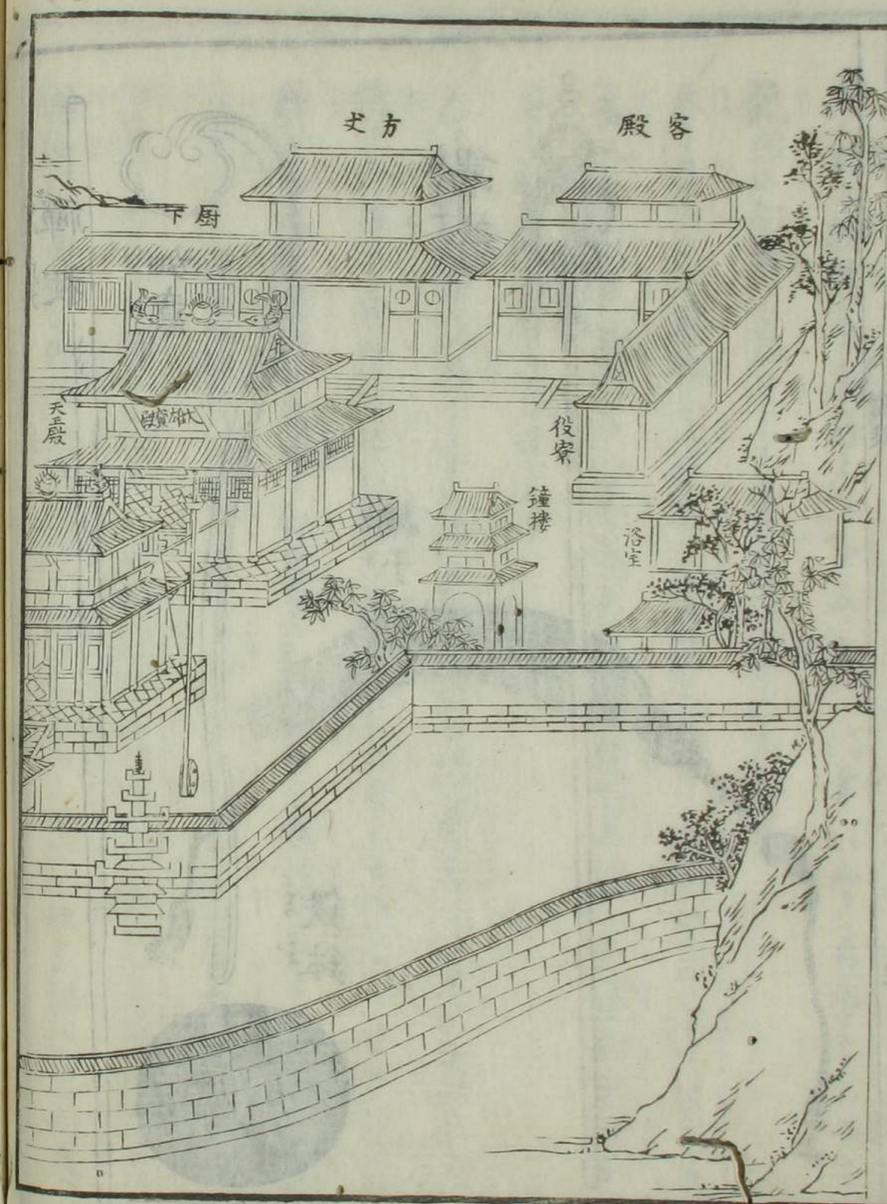
あく別み朝廷よりも免許とふ事みえあくび寺院みく盃事なりと係く
龍牌の供料そて朝廷よりも寄附給賜等れ事かし

○天子皇后よりも龍牌(上使等未着の事かし天子位牌神主等)を
盃みあくび其所の官人年頭みまび寺院(と未着し此龍牌を拜そて
ふを朝廷(拜賀すふ意あり

○天下の寺院を統領そふを僧録部の官好り諸觸等い其末れ知縣みヤ
渡し知縣より寺院(達ひ僧侶の諸職より破戒不如法の僧乞方等れ事知
縣(ヤ知縣みく裁判し軽ひ事ひ知縣切みく執行ひ其事ひ事なひ上
司(ヤ達し僧録部(伺ひの上取扱ふ多くハ一山限ふ寺法の通執行ふ脱衣の掟
あふ事ハ其ひ事ひ詳ひ事ふ事ハ僧録部の度牒ひ寺院の任持より知縣(頒出ひ
間海代上書に知縣衙門みれみく渡さふ事く五枚十枚宛頒諸至制度の

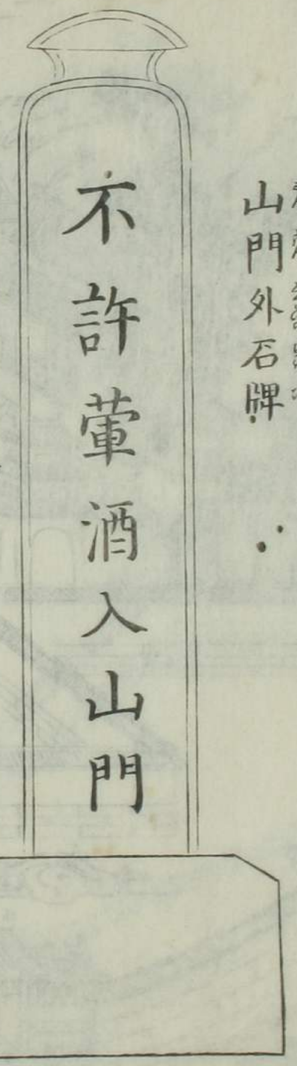



僧徒
禪堂
齋堂
鼓樓
山門
總門


丈方
客殿
下厨
天王殿
役寮
鐘樓
浴室

龍牌

山門外石牌



高サ六七尺廣一尺二寸

僧あるゝ所の師の僧に任持み頒出を請ふゝ度牒年分の定數あるべき制度の人定數等あり旦僧死亡あれば度牒を其寺に返納を寺より官へ返す事なく寺に留置くゝ制度の僧あるゝ死亡切に滅す牒の度牒は式を官府あるべき僧家のみ取扱ふ支みく兼ねく見及ぶる事あるべきあるべき事あるべし○僧家の田地を都て僧は支配あるべきも民は絲の支配は寺院の田園を民間へ貸耕作せしめ年貢を收む若年貢未進不納等あるべき縣へ預出裁判み仮に某園みを人夫を雇ひ耕作せしむ

○新法邪教あるべき寺中み兵器及物を所持は制禁れ支ゝ寺院を撰み建立ゝ所あるべき寺院の數を官府み書留あるべきたみ建立の所は其地の知縣みうかゞひ國海の人造営ゝ

○禪宗ゝ法衣袈裟法衣を著ゝ世方のつうと袈裟は錦縮綿毋綾の類法衣ゝ

緞子縮綿等みな仕立ふなり法衣の制住持は黄色を用ひ長老以上は色衣用ゆ各等かゝゞ平僧は素衣あり右色衣は定りたる制なし服は棉布袖短く明胡の衣服のゞゝ絹地の衣服は制禁ゆゑ大寺住持も着する事を得ず帽子は法或は有るゞゝ表をさゝふ用ひず寒中ゆゑ用ゆる

ものあり鞋は僧鞋にて別に有るなり

○在家の子を僧とあす事は庶人に限りて士大夫以上にても父母の大病あるに

よりて子供を僧にあさんと祈願をし或は其子の好に任せ早く親に放し或は

家貧くして子供を多く養ふ能はず僧と好事あり僧は好事なり

も惣領は僧にならず事を得ず二男以下なりまづ手寄を以て某寺に願

入りて住持を見ひ出ひ其子の僧に引受させ師の名を得み俗に剃髪せざる

以前は髪の結様も惣髪は或は角等ゆゑ習ふ事なし先選僧堂にて

取り出し手を習はせ四書五経を教へ念経熟讀させ十五六歳に至り経を習ひ

終ふる時剃髪を為其内試て学問を詳きうえを出家を好ざる者は親元へ返

す事もあり然習ひ得る者は剃髪の吉日を定ひて住持を始寺中の僧殘らず

本堂の佛前へ出排班し式の如く誦経等有て右の新僧は成べき者を連れ佛

前へ進み出て頭髪を剃髪を剃る師の僧法衣を着佛前へ進み拜して

其法名を度牒に書入新僧へ授し法衣袈裟を着せしめて世尊佛を拜

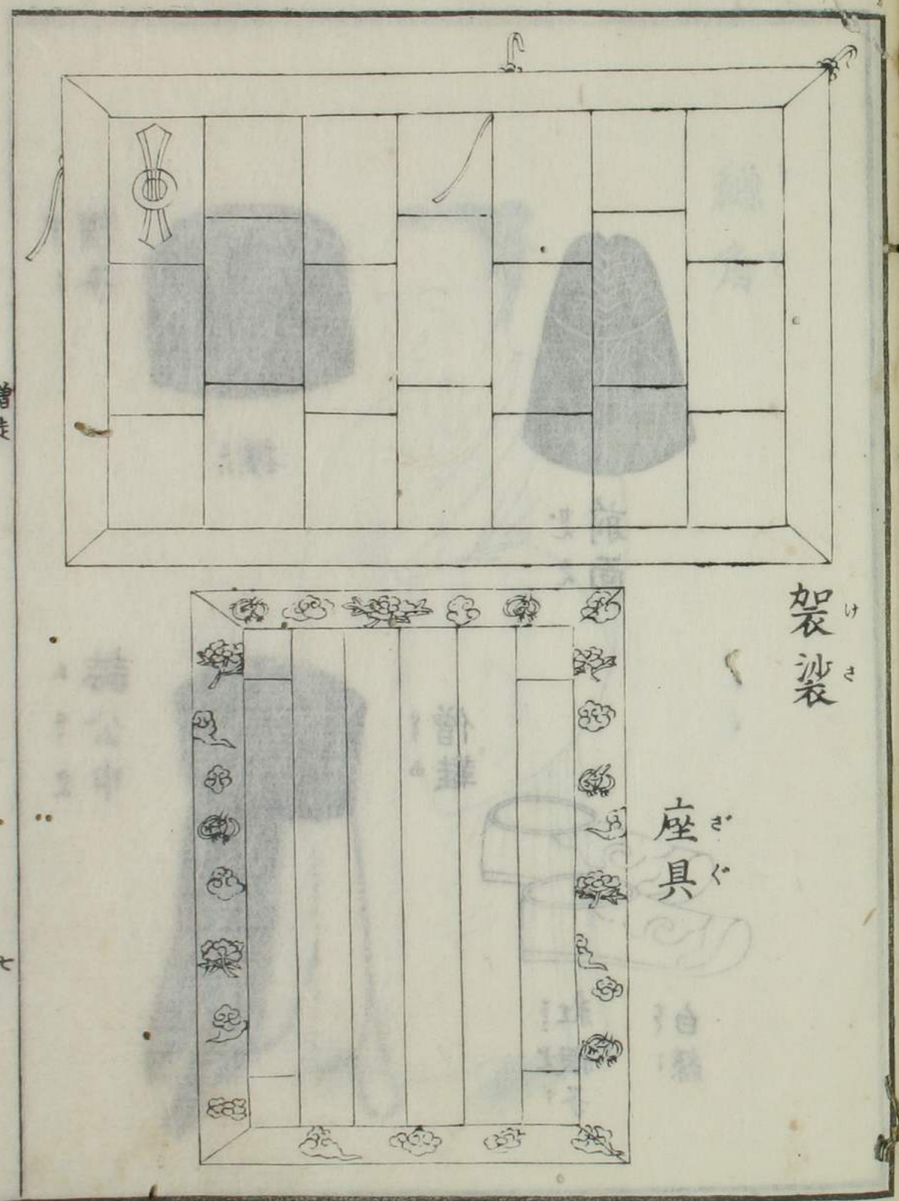
せしめ次に師の僧を拜を師の僧昇時に唱言を授け五戒三帰等の清規を教へ其後

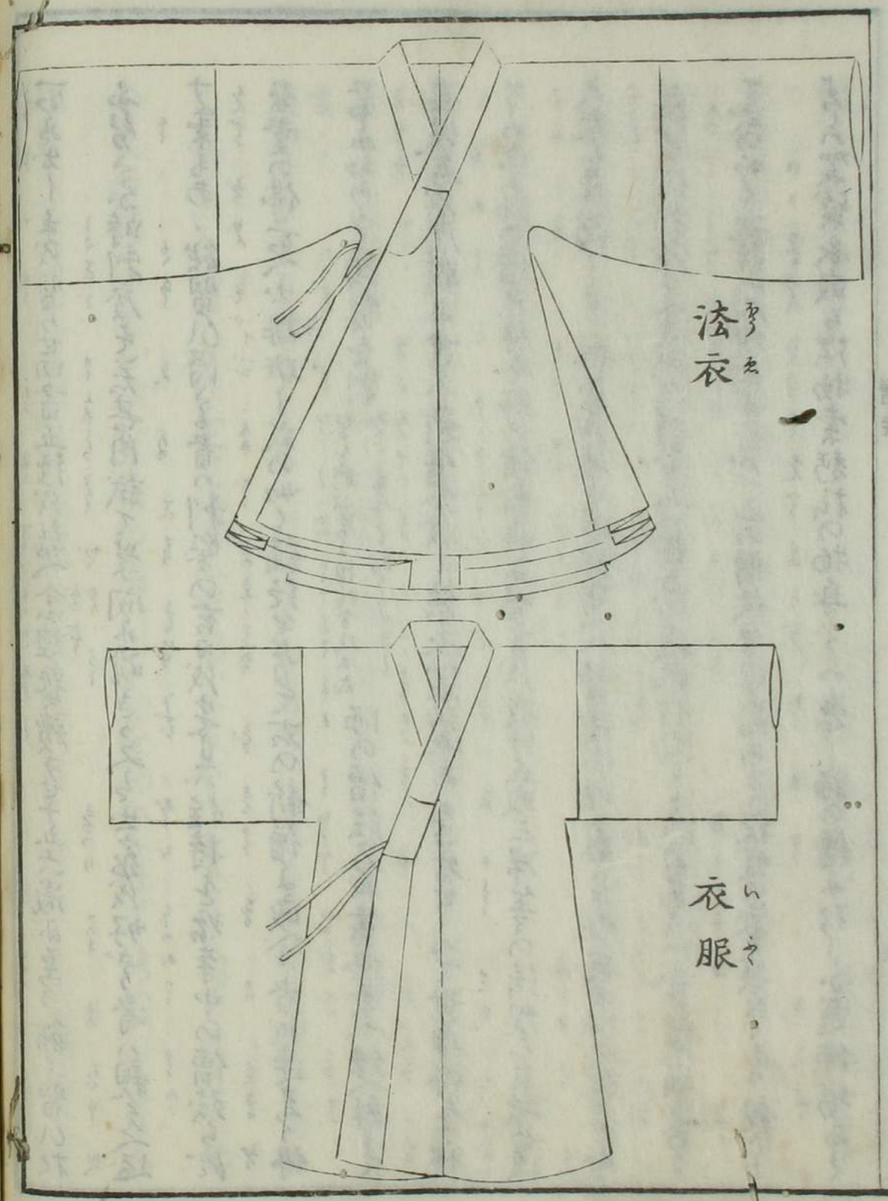
大衆を拜謁して佛前を退き選佛場へ入師の僧住持あるれば其日師の僧を今

日何某儀剃髪をべき旨住持へ申入べ規式の通執行べしと返答あり一山の僧へ通達あり

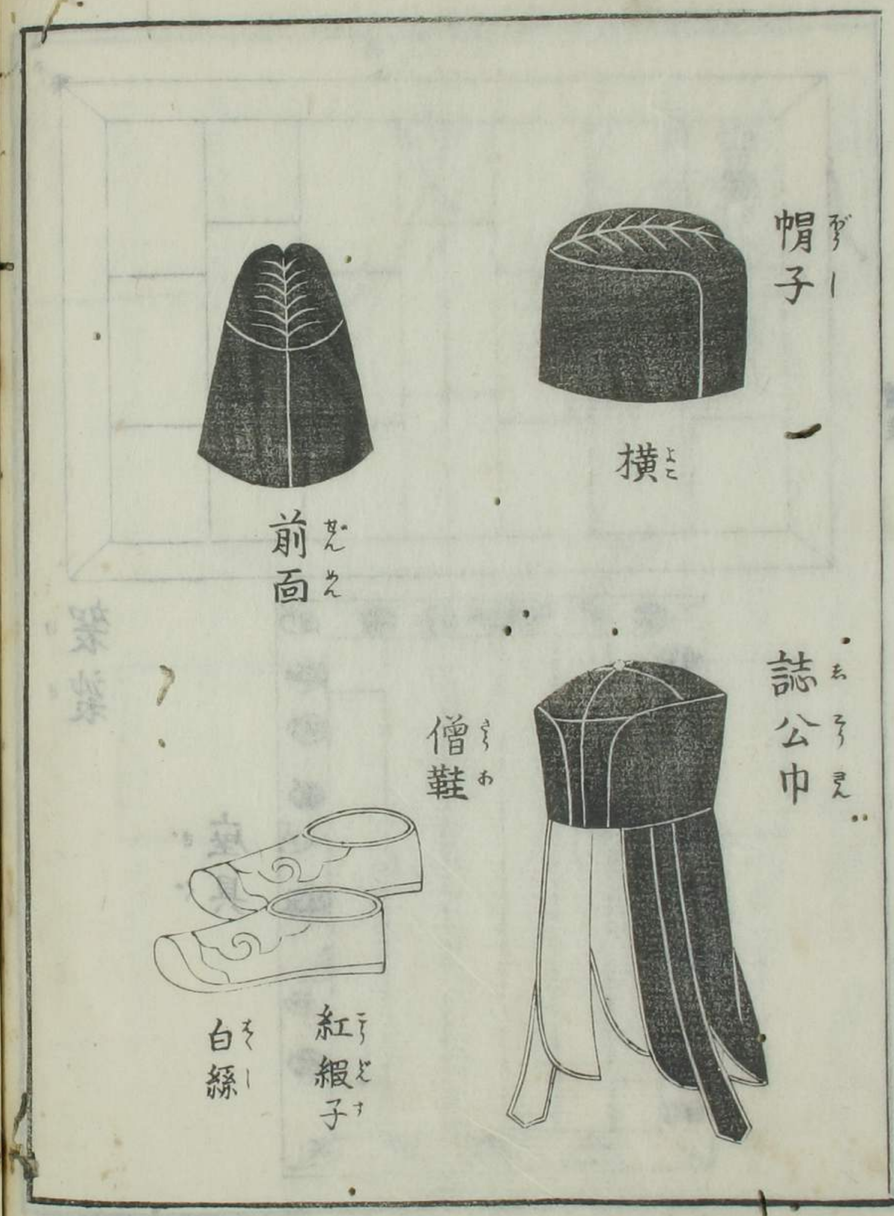
て式の如く執行し右規式は一山の僧徒寺内おのゝく祝儀の饗應等あり親族

より袈裟衣或は諸物索麺花の物身をみ意に師の僧へ贈ふ選佛場へ


僧徒
袈裟
座具


法衣
衣服

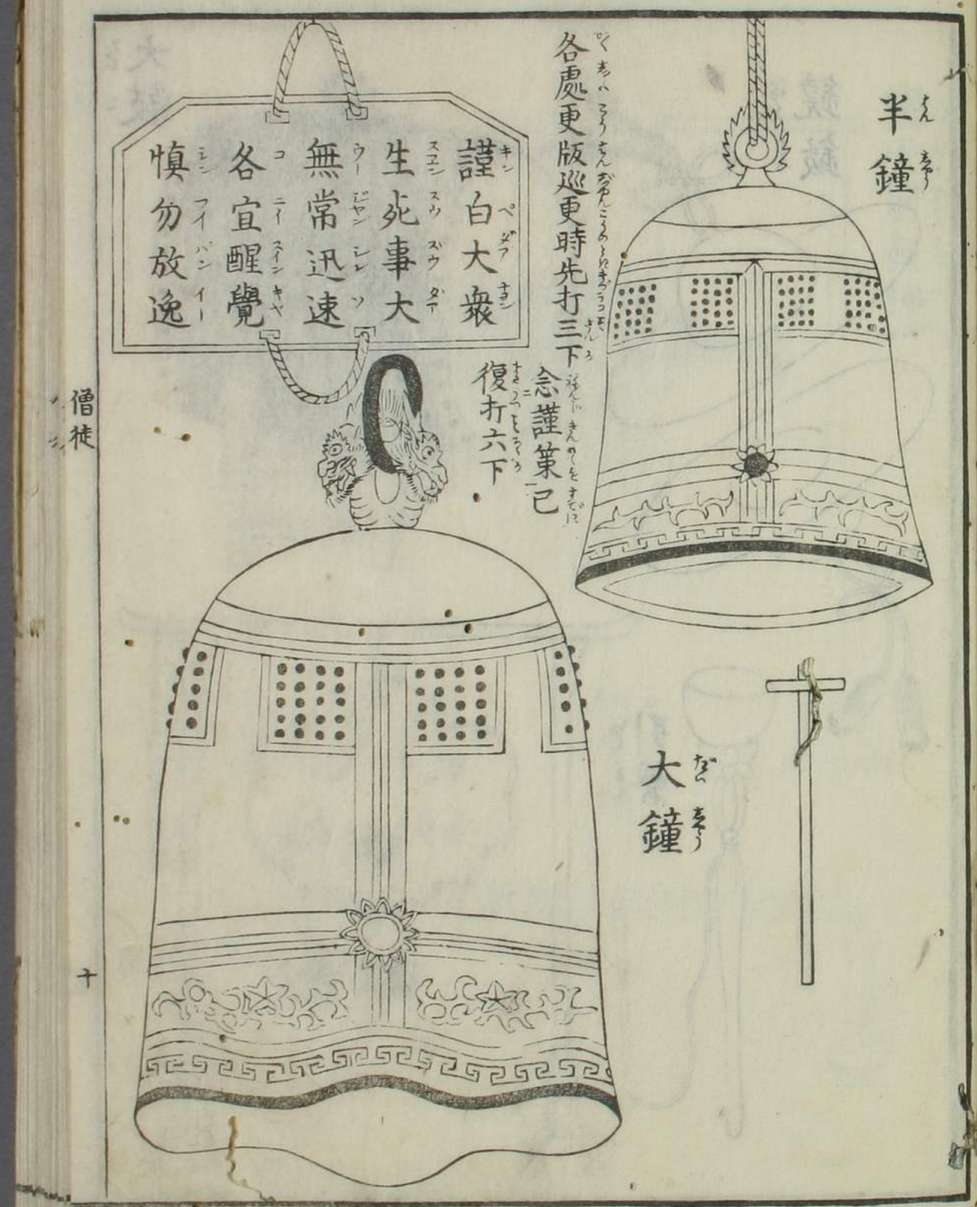
總角
僧徒


帽子
横
前面
誌公巾
僧鞋
紅緞子
白絲

小沙彌

座禪問答佛經等の勤學を為す亦茶の肉を小沙彌と呼小沙弥小僧と云諸事み
さきかふ○日々勤みを巡照とふ役僧とも夜不拔を勤め夜中木魚を敲き
無常迅速一心念佛南無阿彌陀佛と唱へ寺中を巡る一更毎み本堂をゝびみ
禪堂み掛たる更版とる板を叩き此板み書るふ文を高聲み讀諸祭文舞る
五更の更版を叩けば司鐘司鼓とる役僧鐘樓鼓樓み登り鐘を撞太鼓を打ば
其内み殿司役僧の名佛前燈明を點じ香花を供へ打掃潔淨を旦ば茶湯米鐘を
市米鐘を角く首座以下寺中の僧殊に本堂み洗集り誦經始る大衆の内より
一人大木魚一人も銅磬を鳴し茶湯僧より小磬小鐃鈸を敲き鳴し誦經の内
住持提爐を持佛殿並み皇帝の龍牌及靈廟其外諸佛へ拈香し方丈へ帰る
明方み誦經畢て主人の寮に入典座役僧の名齋堂の粥み飯梆とそ魚の形に拵
方掛る或叩き又雲版とる物或叩けば住持或始め首座以下大僧みの内

僧徒

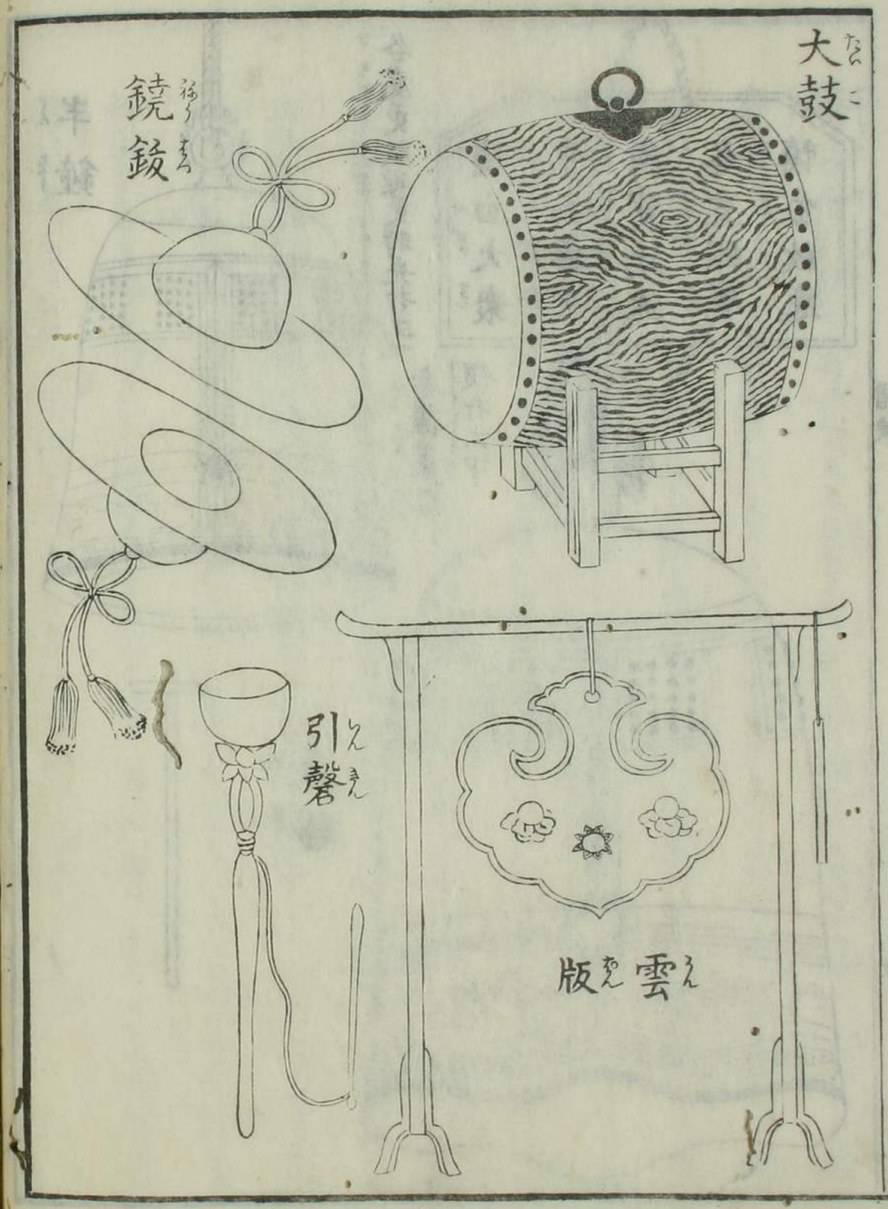


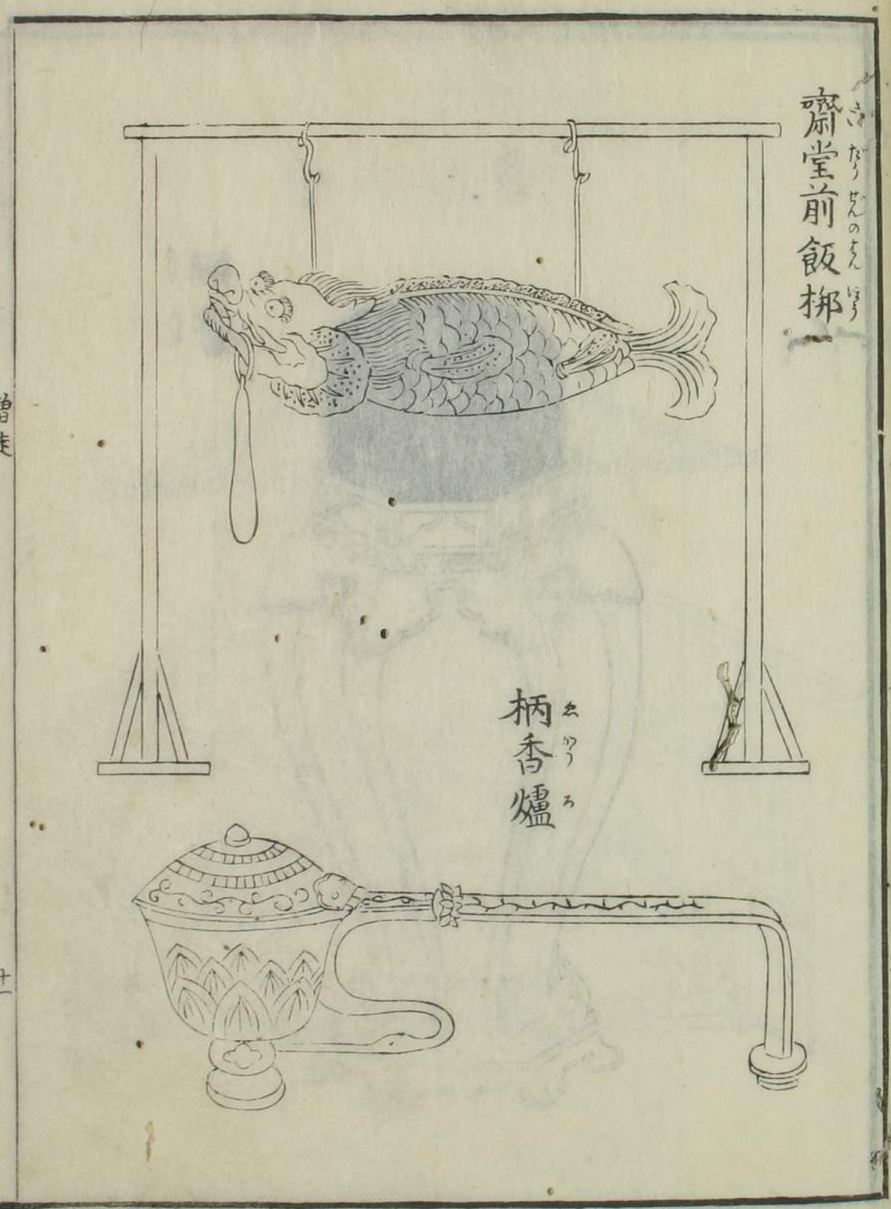
寮々の僧引磬を打齋堂に集る位牌堂に詣て諸經を唱へ齋食吃し了て各の寮に入座禪修學に徳ある又托鉢に出るもあり晝七時過る半鐘を叩けば朝のごとく諸僧集りて諸經を夜一更過る鐘樓の大鐘太鼓を打開靜二更の更版を聞く座禪を止め休息せ

○佛祖供物を毎朝羹飯點じ飯の初穂或僧に朝日十五日の菓子野菜類四季宛僧に寮定式あり足を上供法會執行の時は多少記すべかゝず

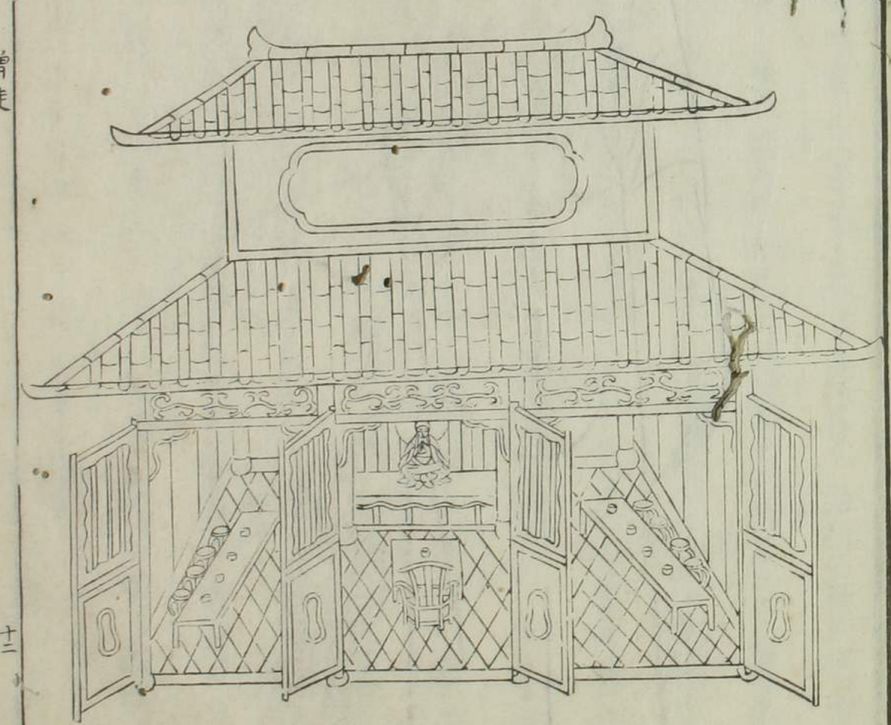
○晝夜寺院の鐘撞て朝七時晝七時夜五時此三度なる外時刻を告ぶ事なし

○出世或志ある僧は遊方僧として諸國を巡り知識を尋ね其寺に掛錫し重て座禪問答或修を此間或行者となる修行進て悟りて道を聞けば其師なる知識を尋ね師と仰ぎ先師の事を受業師と唱ふ行者の間を中切の有髮を修行專なり此行者の内より多く各僧出るなり

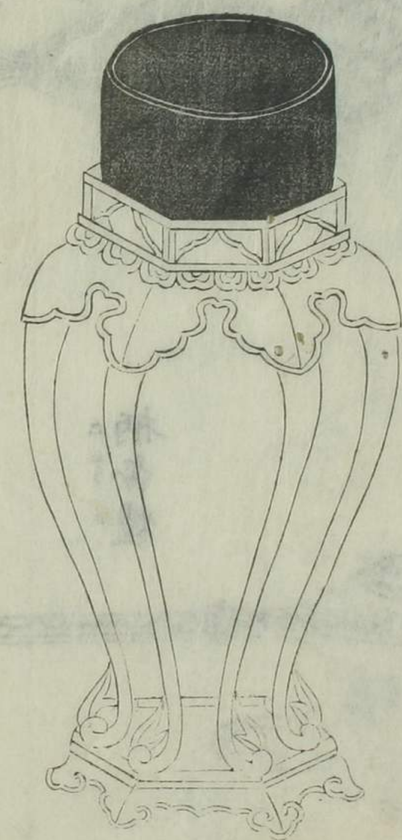

大鼓
鐃鈸
引磬
雲版


齋堂前飯梆
柄香爐

齋堂吃齋



銅磬



遊方僧

○托鉢み出る僧の門唱食とる者あて是ら米錢其外施行の物ゝ何品み限らず取收め帰寺の上夫〻み取認め差配とる役僧あり托鉢み出る僧ゝ寺み忘用事あるゝ又い寺み非常の事ある時い大鐘を撞けい外出の僧號ず寺(僧)とゞ

○檀越とゞ先祖の年回其外法會み〻僧侶を招くみゝ其施主寺(寺)とゞ頼もあり又い供を設く頼もあり供養日数二日の間誦経ゝあるむもあり五日七日の間施主の求めみ同く焰口施餓鬼水懺等の佛事ゝ執行ゝ重立たる僧寺限の時ゝ主人門前まで出迎ひ互み往儀を述廳堂(靖)ゝ茶ゝ進め早ゝて家廟(案内)ゝ霊前み〻拈香誦経ゝ法事ゝ了ゝ布施ゝて一日み僧一人(京平僧い錢百文百五十文)住持長老ゝ銀十文(往返ゝ足ゝ懺資とる)を施主の貧(富)に同く等かゝ

○焰口施餓鬼執行ゝ時い境内ゝ百本新み佛座ゝ設け志ゝ亡霊の神主牌を立燈明點〻錫五事を傍ゝ

僧徒

五事い花瓶二個焰筒二個香炉一個供物い

毘盧壇排式之圖

南無大聖地藏王菩薩
南無大悲觀世音菩薩
南無接引導師阿彌陀如來
南無娑婆教主釋迦牟尼佛
南無啓教阿難陀尊者
南無引亀王菩薩
南無十方諸佛諸菩薩

僧徒

西牛貨洲
北倶盧洲
鐵山
金山
銀山
金山
人道
天道
阿修羅道
護法伽藍
水府龍王
焦面大士
天府神祇
地府靈祇
陰府閻君
城隍土主
背面
背面
背面
背面
背面
背面
畜生道
地獄道
餓鬼道
水陸
飯
水
南贍部洲
東勝神洲

燄口壇排式

副扶座
中座
大扶座

法鏡 イ

排式之時
鏡面朝天置臺上列金剛杵寶錯
大鈴三件

ト

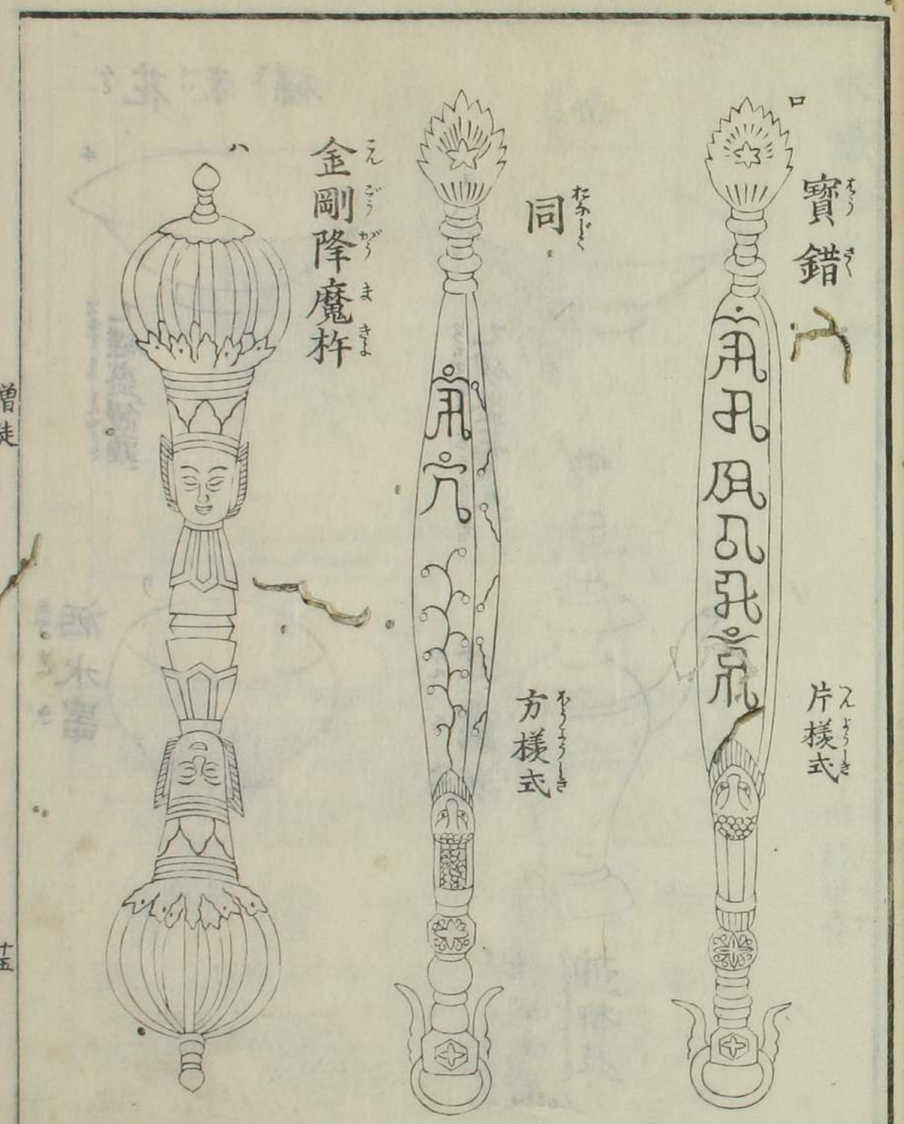
錫五事 和名五具足

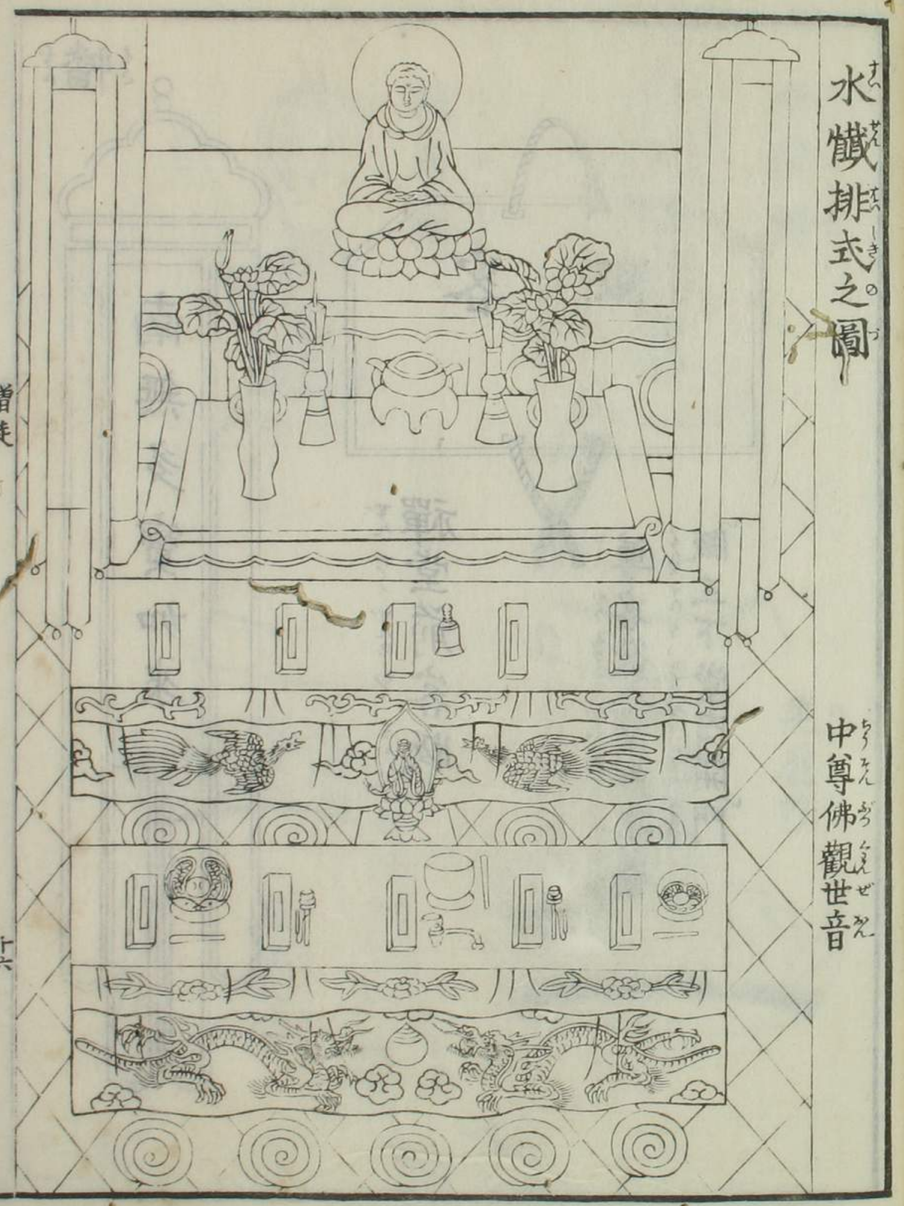
金

曼拏羅
法臺

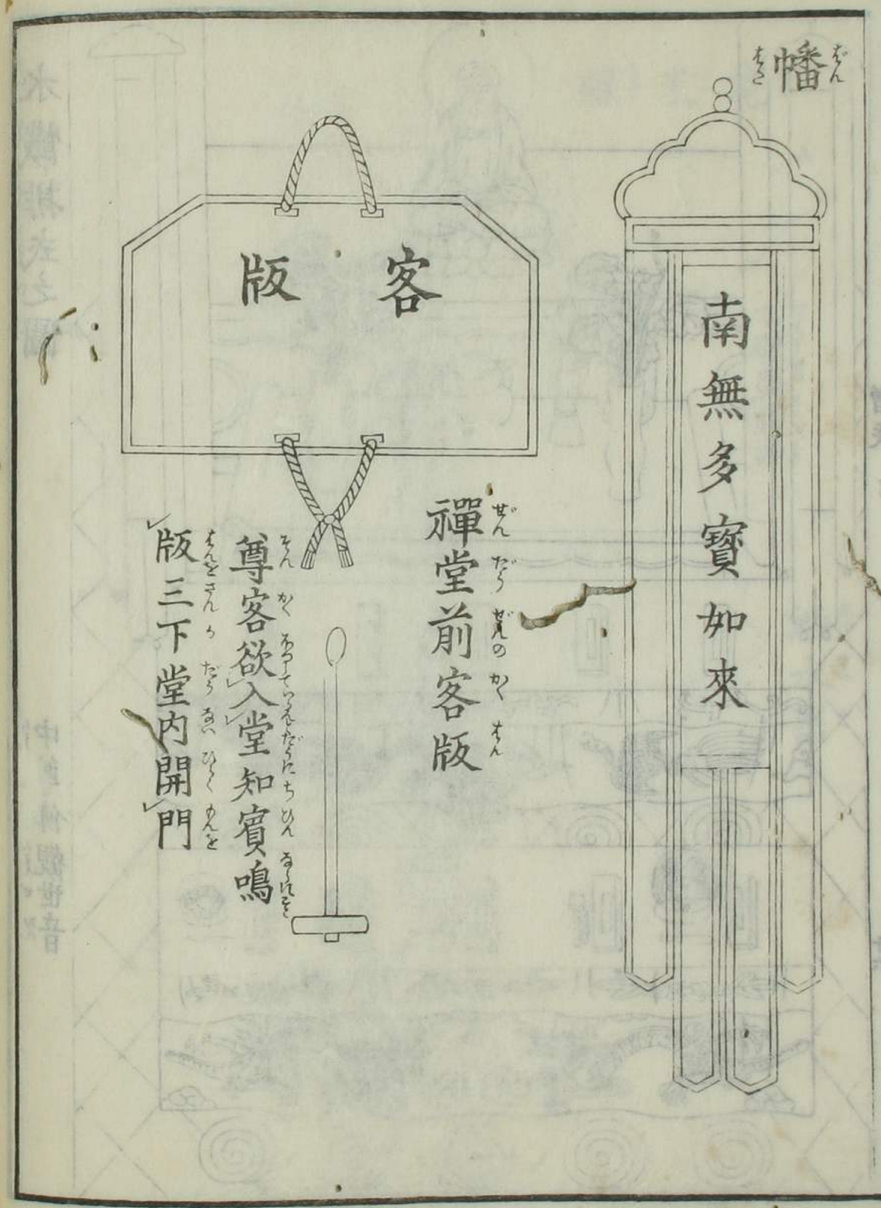
法尺 ヘ

排式之時置
中座經典之右

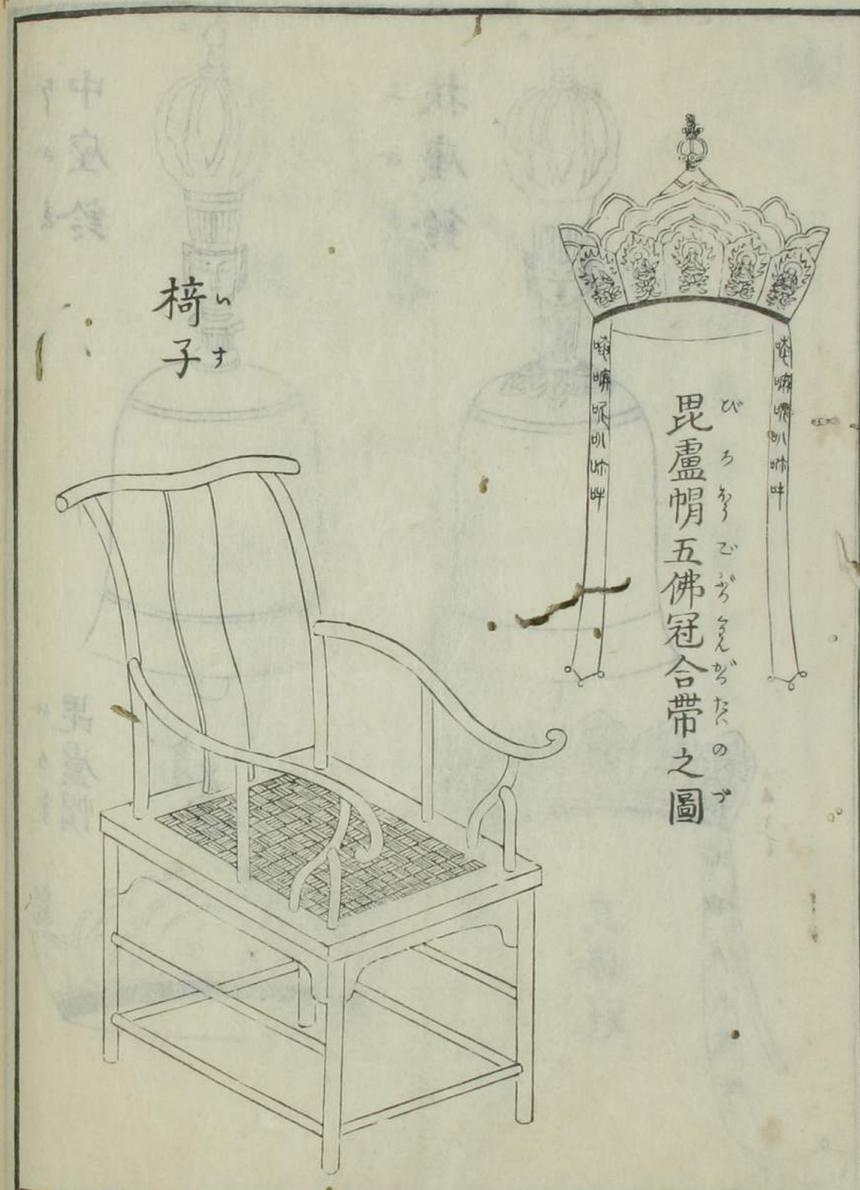



水懺排式之圖
中尊佛觀世音
僧徒

花米碟
仝
乙碟盛饅頭
乙碟盛花米
洒水器
甘露瓶
排式之時
挿柳枝


幡
南無多寶如來
客版
禪堂前客版
尊客欲入堂知賓鳴
版三下堂内開門

中座鈴
扶座鈴
僧徒
毘盧帽
金絲
紅紗
五佛冠
十七



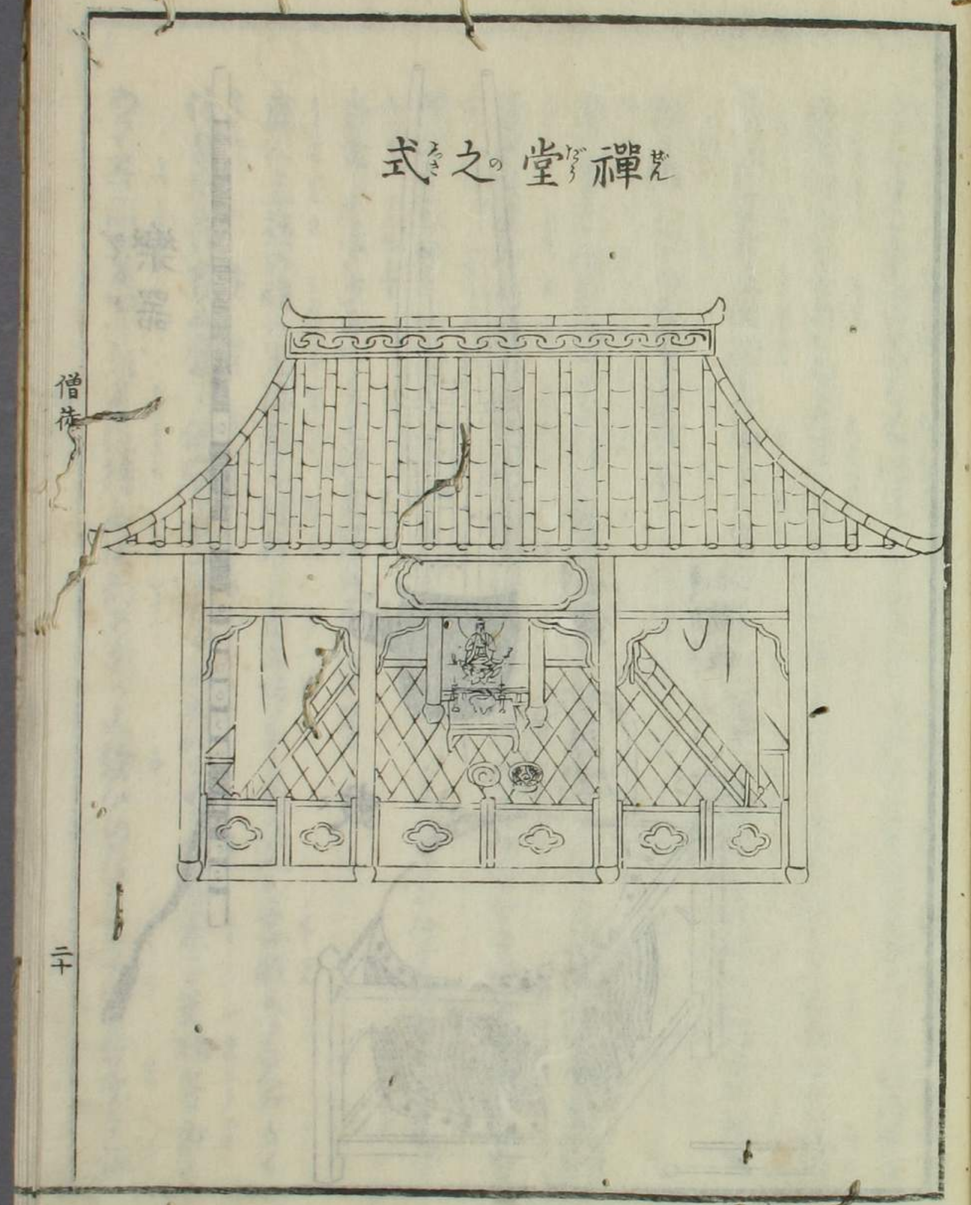
毘盧帽五佛冠合帶之圖

糖餅 桂圓 荔枝 胡桃 落花生 其外砂糖菓子時候の菓物移く供へ其第ゆ方二間高さ一間ゆ方の
燈口壇を設け正面ゆ観音の像或安置し寶鏡等の佛具を傍付さ是ゆ
香花點燈供物見合供へ玄定式の供物ゆ第一盃饅頭七つ酒水一器此三品を
供へ檀の向ゆ方同く燈口壇を設け上壇ゆ七佛の名號を書る
牌を傍 七佛ハ釋迦觀音阿弥陀地藏 下壇ゆ面然大士護法龍天の牌を立る也
阿難引鬼十方諸佛
香花を供へ點燈供物等第のごとく玄定式の供物ゆ〻昭ゆ又元半坪程
さ三尺程の食堂を設け水陸一切男女孤鬼等位と書記し香花點燈供物ゆ
第のごとく定式の供物ゆい大死ゆ器に飯を堆く盛酒水を添へ供へ金其
第ゆ高さ一間廻り九尺程の竹竈を山の形ゆ拵へ金銀の箔紙其外錢帛
眞衣紙等ゆく張たる戒二つ金一つ銀山一つ錢衣山と記したる簾戒之諸
經の僧七人 略すハ五人 燈口壇ゆ昇て本位を金剛上師 一名戒中 尤ハ大

僧徒

扶座有り副扶座とつふ繡花の其次に並び何れも椅子み坐しかたの大敷ふ磬
小鏡鈸等傍分あり又誦経み連く大衆の内一人みく鳴し中社の僧い毘盧帽
とつふ佛冠を戴き鈴及振或の印及袈裟及び其餘扶座の僧い本無引磬及行冥府の亡
魂起度のなを供へ居さふ乗及誦経中次第くに取捨酒水及ひく饅頭み株字を
書食臺み向く投捨尚又冥途みく金銀錢衣服を捨ふ高みく右金銀山積
衣山及燒捨ふ此法を在家みくも至くそこ夜陰みれまふ九二回時経もかくふ
水懺とを同じく佛座及殺け香花點燈供物等始りみ初めくを定式の供物
ふし前み幅半間み長さ二間後の臺及二行み立其前み僧五人宛都合拾人の僧
夫くは佛具及持何れも暗を誦経あふ此法を省略すれば一日み凡そ二日ぐ
繼ふもあり始り水懺もに年忌法會み限ぐ家内安全病気平愈等の行
禱みも執行を何れも施主の方に仕せく自宅みくも執行ふ其の時を法具諸道

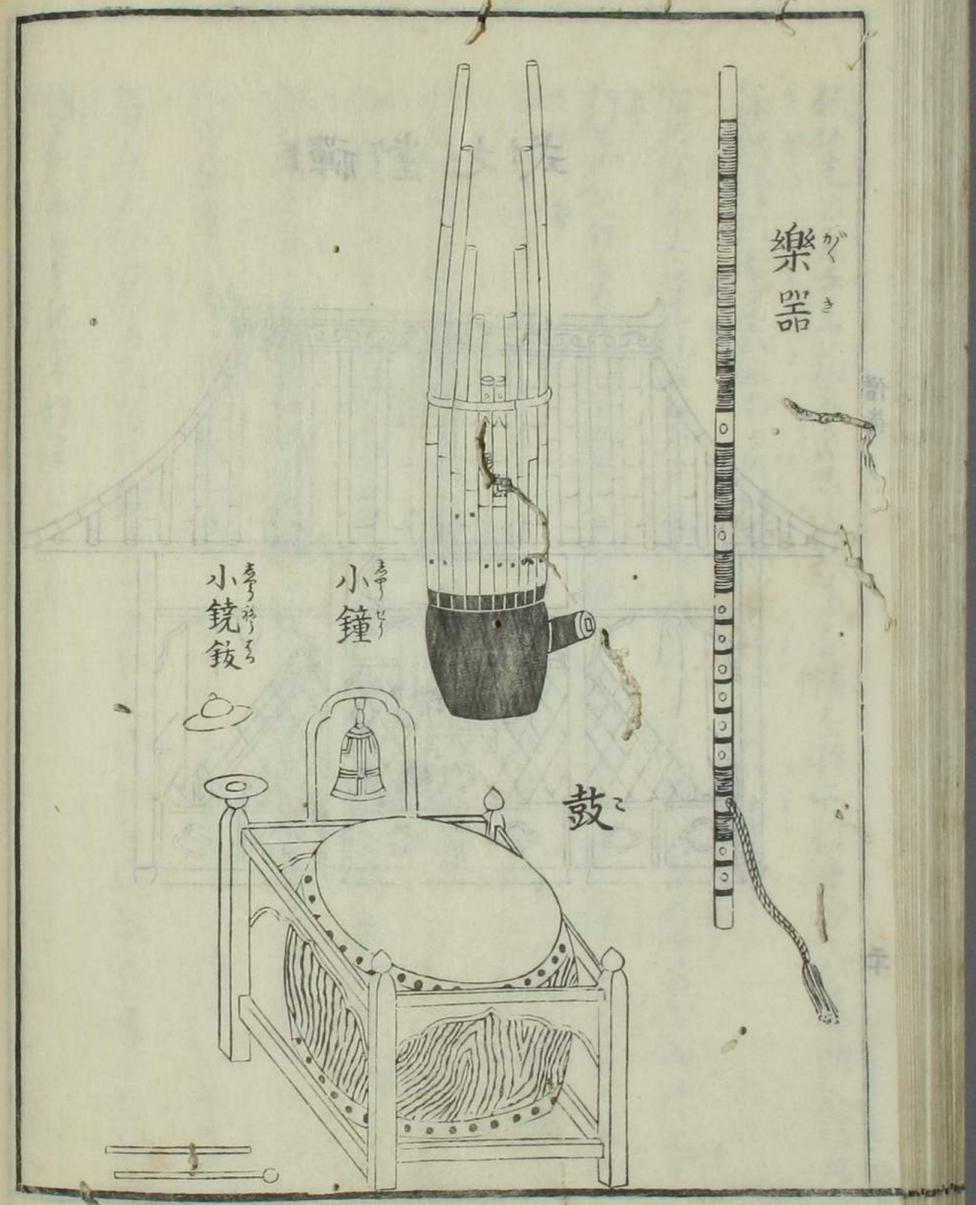
具寺より持就其供養み應じて僧の多少あるを其時親類朋友をも招き
僧侶行逆齋非時等振舞事あり法事平生ば其日数みちぐし勞金少くて
僧一人前二三十目ぐ以下僧の高下施主の身分み應じ送ふ事等ぐ差居
宅狭きを或を故障等みく寺に佛事を頼む時を前度菜料を納れ施主
の求めみ應じて供養及其時を寺みく齋非時の用意を乳施主をぐ施
主の親類朋友み施齋に此を施主の方より男女をも多ふ少く婦女の間を
別間み居りを附事ふ奴婢等給仕して僧侶を到来れ接待禮儀ぐ乳を
此間ふ入ぐ〇在家の位牌及寺院み安置ふ事あれば素より位牌
堂をもし〜ふ格別寺みあるく功あふ檀越い別み位牌及安置〜あるく
香花を供養ふ事あり〇在家喪中の時い日く誦経頼むもあり又七日毎
み頼むもあり何れも絶主の求めみ應じを喪葬の時を僧七八人も集り



柩の先み立手み指みくさしらくあふ幡を持二行みあるべ墓所近ちた
陳頭經ぢを定式みあるべ檀越まを頼ざれば行事ふし

○七月盆みるる寺院みおるく施餓鬼執行すか所もあり其寺の古格みく執
行せざか所もあり○十二月八日を臘八とふ朔日よる八日の曉まで昼夜一山の僧
禪堂みおるく座禪おふよ八日みい菓茶の粥を施ち 竜眼 栗 棗 次菰 柴薪 炭 茶 水 ま ぜ 施さたる成つみ

○御祈願所ふど差極るふ寺院ふし御祈禱の命ハ勅旋みく行るれ
何寺へ申付るるあるべ其寺へ頼遣ぢ又ら官所の見斗ひを仰く修行
ちるふ事もあり其ちるれみるべ等を天子諸宮所等へ獻ずふ事ふし寺院みく護摩神圖守札
僧家みるちれ事ふ奇術ら道家みい專ら行へども



○官人達茶諸の節を第級達しあるに其時刻あり官位の高下によて位持五人役僧山門まで出迎もあり大臣茶諸あるに禪堂あるてるあり客版を陪鐘叩けば役堂の門鐘を撞役僧孫らび出るあり小官あるに役僧中出迎ふ大臣の時は鐘樓の鐘を撞を鼓を打あるひを樂器奏して佛殿へ請じ佛拜手をして加客の名案内して亜に方丈へ伴ひ椅子を設け雑談請じ位持對座し知客側に侍ふ値座の名茶菓子其外時候の菓物等を出ほたるひに寒暖の挨拶あるて饗應あるを酒肴三品あるて出さば帰りに元のごとく山門まで送るに此客の家より香金として多少あるべし金銀を出さるべ

○庶人茶諸の時の先佛殿に禮拜し歩帰るもあり又は客殿へ通るべし休息をしば客に應じ値座まで茶だもあり或は菓子菓物等出あるに其品等かるべき是位持に向あるべし又鼓ひのたる茶菓くるに節を値

座一百次成頼〻方丈を表り面後に僧人あり之を大戸中人と監寺知客等
の近所に侍あり貴賤高下を拘〻ず客殿に至る人を銀銭の多列を見食
香金を多金あり又を線香蝋燭等送るも婦女系絡の時も併殊の〻みく
み帰るもあり又暫く客殿に休息するもあり且つ尼僧俗一人も之なしば
婦女の休息所を別に設けあり之を義系にくも乞ありと乞十三歳の小沙彌
持出る都く寺院に婦女徘徊する事望く官制あり系絡近の妻に若しかば
○后宮の官女等寺系絡の儀を天子御系絡あるべ附随し系絡すべ
官女ばり系絡する事なし
○年始とも官更如る事なく檀家を任持自身年礼に出るもあり又
役僧の内より某山某禅寺納某叩と書系帳成持く系る事もあり外
札守等なく系る事なく元旦より二日なく在家に系あり在家愚衆の方へ

常に往来談話する事在家の者に異る事なし〻行又歳暮あるに檀家へ
野菜菓物猪漬砂糖漬等なく系る事もあり
○本山組合等の事なし〻御条印地なる事もなし且後住成定なる事なし
の役僧評議して任に堪るもの役を選び其地の知縣へ何〻知縣一存なく
後住中後住に任ず時に学徳備なる他國の知識に
名成二人紙も書出し官更中出官の指揮にあり役僧中
より願出官系なく評議あり役僧中より選出なる名系の内より又の外は官
更の存分あり其方役僧中人達〻雙方一致の上後住成定む小寺は官更に評
議に及ぶ○後住進山の時は吉日成撰び入寺は其時に首座以下の役僧
山門外まで出迎ふ此時格式の法法あり互に礼拝手を寺内へ鳴鐘を撞太
鼓を敲き知客より法堂案内して拈香し式法済て房へ入暫く休息

まうる事堂の前に設けあり壇に登り柱杖を突拂子を持侍子に
侍者両人左右に従ひ衆僧の拜を受る此一山の僧悉く出家に依て
種々の事成尋問ふまゝ教示あり其者成て禮拜の規式早く宿房へ
法檀家迄も自分多り入寺拙家あるも此帝扇子杖の物多く多事なし

○僧に妻子の禁制なし故に應有僧にて妻子あるも肉食の僧多く
市中に住居し在家に法事頌経等頼み愚に執行に応じ僧となる
名住持のやうなるものあり

○律宗は医師多く天台宗は天台山一山限り外に出し律宗は重み祈
禱成修し綿服を着し黒色の本綿加衣袈裟着し鉢持を持食事の法
鉢持に飯菜を入れ食成男女比丘に吃す天台宗の僧の法式行事等禪宗と同
○僧道両持の寺院あり寺院に僧侶なり

○寺院内に茶店等はあれども狂言芝居等の事は決してなし 狂言芝居角
力輕業等の事は社内に限り無行也

○道家も有髪にて道冠を戴き法衣を禪家の如くに成て綿服を
業化に密法を修し祈禱成事少し此内太上老君の修法成行者を清
者に成て則張天師の類あり正一道士と云其外雜部修行の分也
妻子肉食に多く市中に住居し乾を火居道士と云業化を勤る事なし

○僧道違犯不如法の者あるに成に軽死事は一山の住持に寺法道法にて
行ひ若重死罪あれは其所の官所に訴へ知縣知府に裁断あるも
大罪あれは假令住持大和尚なりとも官所に訴へ死罪に成て罪の軽重に依て仕置あ
るなり ○道家成支配する僧録都の惣支配に僧録都の下司に僧道官
僧録司道録司あり官所あり

○護符等の事は僧家々執行せり道家みな道家の尊尊は極く三清上帝を祭る三清上帝は中央玉清元始天尊右に上清霊寶天尊左に大清道德天尊道家も郡々寺と同様なく一山あるもいつも市中に居住するもあり社檀僧侶等此事は僧家に知る事なれ〻道士も法を修

○且那と呼事往古をあらはすなり世俗にも當時みな檀越とのゝ呼ふ

○江湖あるひは俗夏此事は異邦にも在家の知る所なり

清俗紀聞卷之十三畢

宮内省圖書寮藏

清俗紀聞跋

向者余之在崎陽也聽政之暇使官屬近藤氏重林貞禧問清商其國之俗習輙適筆焉又隨圖焉終成一書其起稿之始余偶罹疾而百事皆廢及愈而期已迫故未纔還江戸爾後

劇職不暇翻閲因命臣津田永郁校
訂分為十三卷示諸林祭酒請序其端
且請名書祭酒名以清倍紀閲且序而
還之或勸上本公諸同好遂命剞劂
不日而刻成矣澤正甫中伯毅示序其
端嗚呼雖編輯之名在余彼官屬
莫力實為多矣豈可靈其功哉因
備記与此役者姓名于卷末云寛政
己未冬十月中川忠英跋

赤峰脇田順書

大通事　高尾維貞
彭城斐
清河璧
平野祐英

小通事　彭城明矩
神代文鳳
潁川良友
彭城昌尊
吉島潛

畫工　神代干貴
陽忠廉
平井惟德
潁川惟賢
中山保高
彭城以貞
游竜賢
石崎融思
安田素教

清國蘇州　孟世燾
蔣恒
顧鎮
湖州　費肇陽
杭州　王恩溥
嘉興　周恒祥
任瑞

寛政十一年己未八月新鐫

東都書林
本石町四丁目大横町
堀野屋仁兵衛